

第五一號



2004

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人

文

第五一號

二〇〇四年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

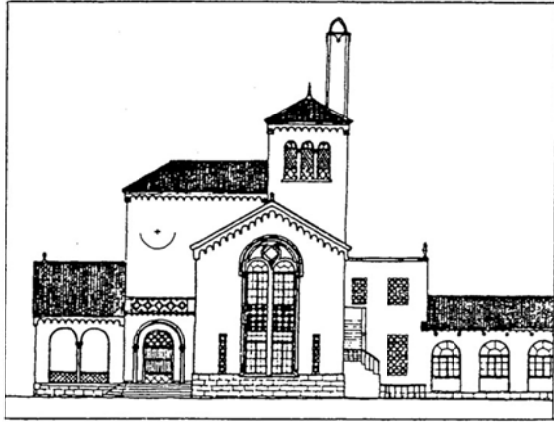
共同印刷工業

非売品

人 文 第 五 一 号

2003年 1月—2003年12月

も く じ



随想

蜘蛛の糸

森 時彦

1

講演

夏期公開講座

5

靈魂の行方(小南)／ヴェーダ祭式にみえる生と死の観
念をめぐって(井狩)／皮膚ともぐさの間にあるもの

(東郷)／問い直される生命観(加藤)

開所記念講演会

11

日本民俗写真史ノート(菊地)／中国古代法が語るもの
(宮宅)／図像からみた古代メソポタミアの王権(前川)

退官記念講演

16

他者認識の思想史(阪上)／私の数量経済史研究(山本)
／改革者としての薩摩藩(佐々木)／インド学の共同研
究ことはじめ(井狩)

彙報

共同研究の話題

22

気懸かりな「江戸の虫たち」

遠藤 彰

線装本の情報と記憶

武田 時昌

私が班長になった理由

菊地 暁

ためにならないはなし

藤井 律之

所のうち・そと

44

ある史料調査の思ひ出

谷川 稜

中古ピアノとクラビノーバ

岡田 暁生

大文字

小関 隆

産学軍協同パラダイス

藤原 辰史

羊男の話す英語

池田 巧

大海に溺れて

佐野 誠子

理化学年代と「考古学的年代」

穴沢 咏光

書いたもの一覧

54

蜘蛛の糸

森 時彦

二〇〇四年四月一日をもって国立大学法人がスタートした。わが京都大学においても、財務会計システムが導入され、財務諸表の開示が義務付けられるとか、国家公務員身分が非公務員になって、教官・事務官が教員・職員になるとか、あるいは雇用保険に加入して失業保険がもらえるようになるとか、変化した点を数え上げれば切りはないが、なかでも二〇〇五年度概算要求におけるルール変更は、かなり大きな変化の一つといえるだろう。

法人化以前は、六月頃に学内で各部署の概算要求について総長ヒアリングが実施され、それらを寄せ集め、一括りにして京都大学本部から文部科学省に提出される、という手順であったが、基本的には総長ヒアリングに先立って、各部署が文部科学省に向いて行う事前折衝で大勢はほぼ決まっていた、と聞いている。各部署は親方日の丸よろしく、ルックイーストで行動していたのである。

ところが法人化以降は、各国立大学法人が独自の判断で運営



に当たるといふ建前のもと、概算要求も各法人の中期計画と整合するものが要求されるようになった。京都大学でも、例年よりすこし早く五月の連休明けに、従来どおりの書式で各部署が作成した概算要求書類にもとづいて、従来どおりの総長ヒアリングが実施されたものの、その後は様相が一変した。

国立大学法人役員会のもとに設置された全学委員会から各部署に対して、学内審査のための資料として、委員会独自のフォーマットによる概算要求書類を作成して提出するよう依頼が来た。新しい教育研究組織の設置要求は企画委員会、設備要求は財務委員会、施設要求は施設整備委員会が審査すること、人文研は企画委員会と財務委員会のフォーマットに従って書類を作り直し、審査をお願いすることになった。

これで一安心、各委員会でも厳正な審査のうえ、京都大学としての重点順位を決定して、文部科学省に提出されるものと思いきや、さにあらずやはり各部署単位で文部科学省と事前折衝することが奨励され、文部科学省詣でが再開されたのである。そして文部科学省のフォーマットに従って、もう一度概算要求書類を作成しなおして提出する手間も案の定追加された。学内審査の結論は、文部科学省の反応も加味しながら、最終的には役員会で審議される予定と聞いている。

法人化以降、二〇〇三年度実績をベースにして配分される運営費交付金が、第一期中期計画期間を通じて毎年一定の効率化係数を掛けられて減額していくものと見込まれる状況下で、概

算要求の財源に当てられるのは、新しく設けられた特別教育研究経費の枠だけであることも、しかと心得ておかなければならない。要するに、運営費交付金を増額する唯一の途は、特別教育研究経費を獲得するしかないということなのである。

二〇〇五年度の特別教育研究経費は、教育改革・研究推進・拠点形成・連携融合事業・特別支援事業の五つのカテゴリーで要求することになっている。ところが二〇〇四年度実績では、国立大学全体で三六七億円が特別教育研究経費の名目で手当てされたものの、既定経費がすでにかなりの部分を占めたという。二〇〇五年度は些かなりとも積み増しをはかるとのことではあるが、ある人の試算では、新たな事業に回せるのは、一校当たりになると、せいぜいで三億円程度ではないかとの見通しもある。

これに対して、京都大学一校だけでも組織、設備、施設を合計すると、一二〇〇億円にのぼるものと推定される概算要求が提出されている。運営費交付金の増額という天上につながるただ一筋の途であるこの「蜘蛛の糸」は、まさしく超高番手の糸なのである。新旧のルールが入れ替わる時に特有の混乱も加わって、時間と手間の浪費はまだしばらくは続くものと覚悟している。

ここまで綴ってきたところでふと、ある記憶が蘇ってきた。数年前にあった吉川忠夫氏の定年退任記念パーティーの時のこと、小南一郎氏が惜別の挨拶に立ち、所長職に就いておられた



当時の事に話がおよんで、「あの頃は所長も閑だったんですね。なにしろ在任中に四百枚を越す大論文を『東方学報』に書かれたんですから」と結ばれた。こういう誉め方もあるのかと、いたく感心したことをいまでも鮮明に覚えている。長大な研究論文とまで贅沢を言うつもりはないが、せめて少しは学問的な香りのただよう「随想」をものする余裕がもてる日の再来を願うこと切である。

二〇〇四年六月記



講演



夏期公開講座

靈魂の行方

——たましいの古代と現在——

小南 一郎

我々は、現在という時代社会の中で、靈魂について、どのような姿勢を取ったらよいのであろう。靈魂が存在することを自然科学的に証明できないことからして、靈魂をめぐる種々の観念について、それを、過去の人々の迷信だとして、完全に無視してしまつてよいのであろうか。靈魂に対して、こうした態度を取るべき

だといった、明確な答えは、簡単には得られない。ただ、過去の人々が、靈魂についてどのように考えて来たのかを十分に知らないままに、我々の態度を決定することはできないであらう。

中国の古代においては、ある人が生きている間は、魂と魄とが一つに結合しているが、その人が死ぬと、魂は天に昇り、魄は大地に沈むと考えられていた。魄が肉体的要素を指す言葉であるのに対して、魂は、直接には見たりすることのできないが、人に生命を付与する、靈魂的な存在なのであった。

人が死んだあと、魂は天に昇るのだとされているが、より古くは、祖霊たちのいる世界にもどって行くのだと考えられていたものであろう。現在でも、中国南方の少数民族地域では、人が死ぬと、「指路経」を唱えて、死者に対し、祖先たちの世界にもどるための道順を教えるという儀礼が行なわれている。

祖霊たちの世界は、一種の生命力のかたまりであり、そのかたまりの一部分が分離し、この世界にやって来て、肉体と個性とを備えて生活をする。やがてその個人が死ぬと、その小さなかたまり（魂）は、祖霊の世界へともどって、大きなかたまりの中に吸収される。喪葬儀礼の主要な機能は、現世で備えていた個性を消去して、元来の、生命力のかたまりの中へ、つつがな

くもどすことにあつたと言えるだろう。

このような、生命力の循環の観念のもとに、人々は、安らかな生死を送っていた。しかし、社会の複雑化とともに、人々の意識の構造も変質し、こうした循環構造が順調には働かなくなる。死者たちの魂が、すんなりとは祖霊の世界にもどって行かなくなるのである。

「春秋左氏傳」は、この世で多くのエネルギーを取り込んだ支配者階層の人々と、強死（不慮の死）をした人とは、その魂がこの世に留まり、それを祭らないと、人々に祟りをなすと言う。この世界への執着というかたちでの個性が伸長するとき、生命力の循環システムに大きな故障が生じるのである。

現在の我々は、さらに肥大化した個性を懐いて生きている。その個性は、単純な喪葬儀礼などでは消去できないほどの大きさのものとなつてしまった。その反動として、我々は、生命力の循環といった古来の民俗観念を強いて無視しようとしている。靈魂の存在を信じないというのは、優れて現代的な選択なのであるが、その選択が相当に悲劇的なものであることも忘れてはならないであろう。

ヴェーダ祭式にみえる生と死の観念をめぐって

井 狩 彌 介

古代インドのヴェーダ祭式文献を貫く基本志向は、宇宙の秩序を知ること、すなわち世界を支えている理法を知ることにあつた。祭式を通してみられる秩序観念のあらわれは、時間と空間のふたつの側面に典型的にみることができるといえる。朝夕、太陽が登り、沈む刻限に行われるもつとも単純な祭式であるアグニホトラに始まり、ヴェーダ祭式では、太陽の運行、月の満ち欠けに対応してさまざまな祭式が行われてゆく。その背後には、祭式の挙行が「時」のめぐりを保証するとの信念が存在している。

祭式から窺える空間秩序のもつとも重要なものは、宇宙のなかのさまざまな次元の存在には、それぞれの次元間での対応があるという観念だった。異なったレヴェルの存在たちの間には有機的な連関があり、それらの対応によって全体がひとつの有機的な世界を形成している。宇宙内のそれぞれの存在はそれぞれの役割

を担っており、全体の中でその役割を補完的に果たすことによつて全体としての宇宙の秩序が保たれる。祭式のなかでこのような対応関係をもつ異なった次元として捉えられたのは、祭式を通じて操作される対象として認識される神々や宇宙の諸力が働いている大宇宙、それらを祭式によつて操作しようとする小宇宙としての人間、さらに操作が行われる場としての祭場という三つの次元がもつともよく知られている。

祭式によつて求められる目的の代表的なものは、家系存続のための子孫であり、財産としてもつとも価値あるものとされる家畜だった。またいっぽう、生涯行い続けられる祭式の効果として死後に行くべき世界としての天界（スヴァルガ）が求められる。すなわち、死後の天界への再生である。

祭式文献には生物学的な生と死に加えて、祭式を通じての死と再生がさまざまな形で繰り返して語られている。講演では、特にヴェーダ後期に豊かに発展したアグニホトラ祭式と葬送儀礼をめぐる死と再生の観念に焦点をあてて紹介した。ここでは聖火への献供の象徴解釈を通じて、循環的生命観とでもいえるべき、生命のエッセンスがこの世と来世とを循環するという宇宙的なレベルでの生命力の循環が語られる。ここで注目されるのは、後代のいわゆる「輪廻説」に中心となる、

再生が悪であるという考え方ではなく、宇宙的な生命の循環を肯定的に語っている点です。

ヴェーダの祭式家たちは生物の生命をどのように考えていたか。祭式においては供物を聖火に献じる。供物には動物、植物、乳などが用いられるが、供物の加工に関し、祭式家たちは他者の生命を奪うことへの明確な認識があり、動物のみならず植物についても「殺害」への懸念、忌避が意識されている。この問題は他者の殺害はあの世での報復という観念に連なるが、生命体を傷つける、殺すことへの忌避の観念は、後代のヒンドゥー教での「不殺生（アヒンサー）」の思考に連なるものとして注目されよう。

皮膚ともぐさの間にあるもの

東郷 俊弘

鍼治療とならび東アジアで長い歴史を持つ灸治療は、ヨモギ葉の線毛を乾燥させて作ったもぐさを皮膚表面において燃焼させるという、外観上は極めて単純な治療法である。今日では簡便なお灸のすえ方を記した本には事欠かないから、「どのような病氣」に、「何故」効くのかはすでに自明に思われるかも知れない。しかしいわゆる科学的な検証という観点からいえば、灸の熱刺激に対する感覚受容器の存在や施灸後の血液像の変化については詳しい知見が得られてきているものの、古来文献に記されてきたような、特定の経穴への施灸がもたらす治療効果の機序を説明するには至っていないのが現状である。

数年前に、はり師・きゅう師の資格は国家資格となつた。国家試験では実技試験が省略されるため、業界では若い鍼灸師の灸技術力の低下が懸念されているけれども、いっそう深刻なのは、鍼灸学校などの教育の

現場で灸治療の適応や刺激量をどのように教えるか、という問題である。先述したように灸の効果については科学的な検証が十分になされていない以上、教育に際しては教える側の経験に頼る部分が大きくならざるを得ない。臨床経験が豊富な教師であれば、自身の臨床例から得た情報についてリアリティをもって生徒（弟子）に伝えることが可能だが、そのような臨床家、教師は決して多くはない。中国では皮膚への直接灸を行う臨床家はほとんど見られなくなつた。

昔から中国でも日本でも人々は、この一見単純な治療法に様々な意味づけを行つてきた。講演では、灸治療ではないが端午の節句にヨモギを飾る習俗が古代中国にみられること、平安時代の灸治療が陰陽師による吉日の選定と関連していたこと、特定の経穴（足三里・膏肓・関元）や阿是穴への施灸の意義、重要性が各時代における医療の文脈や身体観に即して強調され、かつそれらが長い医療史の中で不断の再評価をへて、実践されてきたことなどを文献の記述を頼りに述べた。養生灸で有名な足三里の施灸も『千金要方』では「気を下げる」ツボとして使用されていたが、文献の転写時の誤りから養生を目的としたものへ変わり、日本では兼好法師も芭蕉も養生の文脈で同所への施灸を推奨したのであつた。

講演ではまた、近代以降、地域保健に貢献した家伝灸の一例として、「四つ木の灸」をビデオで紹介した。

これは親指大のモグサを上腕のツボに置き、最後まで燃焼させるもので、施灸後同所に膏薬を毎日塗り、排膿させることを目的とした打膿灸である。施灸箇所には大きな瘢痕を残すため、今日の美容観からは受容しがたい施灸法といえよう。またこうしたやり方は当時にあつてさえ一般的な灸治療であつたわけではない。しかし、昭和三十年代まではこうした施術を万病に対する予防手段として受け容れる土壌が人々の中にはあつた。最盛時には観光バスで治療所まで乗り付け、施術を受ける団体も頻繁にあり、治療所ではツボ周辺を手で押さえ、患者の感じる熱感を和らげる専門の人を雇わなければならなかつたという。

皮膚とモグサとの間にはほんのわずかな隙間しかない。しかし、その隙間に人間の「からだ」と「やまい」に関して、どれだけ多くの「物語」が紡がれてきたか。それは文献記述からも、フィールド調査からもわかる。その物語の豊穡さは、人々が医療に求めるものが決して単一の物語に収斂されるものではないことを何よりも雄弁に物語るのである。

問い直される生命観

——現代の生命科学が提示するもの——

加藤 和人

20世紀半ばに分子生物学が登場してから半世紀、生命科学は単に生命現象の解明を進めるだけでなく、さまざまな応用技術を生み出す段階へと変化した。人や生物の成り立ちや進化の歴史など基礎研究面ですすまず深い知識が得られる一方で、応用技術の是非についての社会的議論が巻き起こっている。

例えば、多様な細胞に分化できる幹細胞を使った再生医療は二十一世紀の医療として注目を浴びているが、そこで使われるヒトES細胞は、本来は個体になる可能性を持った人間の胚（ヒト胚）を利用することで作られる。結果として、ヒトの胚や受精卵を医療の進歩のために壊してよいのかという問題が生じる。

クローン技術については、クローン羊ドリーの誕生以来、特定の人間と同じ遺伝情報を持った「クローン人間」を作つて良いのかが議論されてきた。現時点では技術自体が未熟であることと、生まれてくる人間の

尊厳が侵害されるとされて、多くの国でクローン人間の作成は禁止されている。だが、将来もし技術的問題が解決したなら、人間の尊厳の侵害といった倫理的理由だけが禁止の理由として十分に強いかどうかについては議論が分かれている。

生命科学が新しい知識や技術を生み出すことによって、現代の社会における生命や人間の見方がもう一度問い直されているのである。ヒトの受精卵をどこまで生命とみなすのか、クローン人間は（もし安全な方法で作成できたとして）これまでの人間と何が違うのか、それ以外にも問題は山のようにある。

ほとんどの科学研究の現場では、医療の進歩や知識探求のためにひたすら研究が進められているが、こうした問題を考えようという動きは研究の内外にある。日本のヒトゲノム研究のリーダーであった松原謙一は『遺伝子とゲノム』において、生命現象のメカニズムが解明され応用技術が進歩したことよりも、生物や人間が歴史的存在であることが明らかになったことが、生命科学の大きな成果であると述べている。生命あるものを代替可能な分子機械とみなすのではなく、一個の種も一個の個体も、すべてが一度限りの存在であると考えることから生命への畏敬の念が生まれ、さらには技術の使い方についても新しい考えが生まれてくる

可能性が示されている。

米国の政治学者であるフランシス・フクヤマは、『人間の終り』の中で、人間自身が人間を操作する手段として、遺伝子操作および薬剤による精神活動の操作を挙げ、後者の方が目前に迫る脅威であるが、遺伝子操作についても将来問題になるとしている。そして、技術の是非を議論するためには「人間とは何か」という問いを発せざるを得ず、それを考えるために、哲学や歴史学などの学問が人間をどのように見てきたかを振り返る必要性を主張する。

もとより、生命とは何か、人間とは何か、といった問いに一つの答は存在しない。にもかかわらず、生命や人間についての一定の考え方を持たずに、生命科学から生まれる技術の是非を議論することは難しい。現在は、一部の法学者、宗教学者、生命倫理学者などがそうした議論に参加しているが、多くの議論が近現代の西洋思想をもとにしている。より広い時代を見渡し、例えば、古代中国やインドにおける生命観を知る人々などが参加することで、現代の生命観・人間観を思い切って相対化した議論ができるのではないか。そしてそこには、「人文生命科学」とも呼ぶべき新しい学問の営みの可能性があるのではないだろうか。

開所記念講演会

日本民俗写真史ノート

菊地 暁

「民俗学」という学問がある。日々の暮らしの中から育まれるコトバやモノやワザを手がかりに、史料や遺物に痕跡を残すことのない普通の人々の歴史を解き明かそうとする学問だ。こうしたコトバやモノやワザをひっくり返して「民俗」と呼ぶのだが、ではその「民俗」を被写体とした「民俗写真」は、いつ、どこで、だれによって撮影され、そしてそのことが「民俗」と「民俗学」に何をもたらしたのか、考えてみたい。

日本において「民俗写真」が撮影されるようになったのは、大雑把に言えば大正から昭和初期にかけてのことだ。ちょうどこの時期、柳田国男により日本民俗学の体系化が推し進められていた。とはいえ、この新

たな学問と写真というメディアが取り結んだ関係は、それほど生産的ではなかった。「演出」の必要性を訴えた写真家・土門拳と、それを否定した柳田とのすれ違いはその最たるものだ。

民俗学者の写真に対する貧困を端的に示したのが、石川県奥能登地方に伝えられる農耕儀礼「あえのこと」をめぐる一件だ。昭和二十六年、とある農家で「あえのこと」の写真が「発見」される。この写真は柳田に届けられ、日本の祭りの原初的形態を示すイメージとして盛んに利用されることになる。だが、そこに写された儀礼には戦争の影響による改変が加えられていたばかりか、撮影の経緯それ自体が戦争と密接に関わっていたのだ。こうした戦争の痕跡に無頓着なまま写真を使い続けたのが、あの「演出」を否定したはずの柳田とその門下だったことは皮肉というほかはない。

一方、写真家は「民俗」という被写体とどのように対峙したのだろうか。この点を考える上で「民俗写真の第一人者」と称される芳賀日出男の軌跡は興味深い。大連に生れ中国を題材としたグラフ雑誌を夢見た芳賀は、民俗学者・折口信夫の講義を手がかりに「日本の稲作儀礼」というテーマに邂逅する。九学会連合奄美調査を機に社会科学的な記録性を指向した芳賀は、そ

の意図と方法を処女作『田の神』に結実させる。この後、芳賀は撮影対象を海外に拡げるのみならず、大隈

万博「お祭り広場」で民俗芸能の演出に携わるなど、写真家という枠を超えて活動していく。そしてついに、当初まるで見向きもされなかった芳賀の写真は、高度経済成長を経た日本社会において、消えゆく「日本人の原風景」の記録として迎えられ、戦後日本を代表する写真家の一人となるのだ。

「民俗写真」があるということ。それは決して単純なことではない。それは、撮影者・被写体という生身の身体が、技術、資本、制度、学知といった多様な水準と交錯する、きわめて複合的な方法と実践の領域である。そして、その歴史的な堆積を解きほぐし思考していくことは、さまざまなメディアに取り囲まれた私たち自身のありようを考えることも無関係ではないはずだ。

中国古代法が語るもの

——張家山漢簡《二年律令》からみた漢代の社会——

宮宅 潔

副題にみえる「張家山漢簡」とは、一九八三―八四年、湖北省江陵县郊外の張家山漢墓から発見された一群の竹簡のことである。そのなかに《二年律令》というタイトルのつけられた一巻の竹簡冊があり、それが漢初の律令を記したものであることは、かねてより知られていた。二〇〇二年の暮れに、ようやくその内容が公開され、以来この資料に多くの研究者が取り組んでいる。《二年律令》は法文集であり、法律・刑罰制度の研究に役立つことはもちろんであるが、同時に当時の社会についても多くのことを語ってくれる。

春秋戦国時代の混乱、さらには秦滅亡後の抗争を経て、ようやく安定を得た漢王朝の初め、国力の回復、わけても人口の回復が急務であったことは、想像に難くない。喧嘩をして胎児を流産した場合、喧嘩の相手が悪化されただけでなく、敢えて喧嘩を買った母親にも罰金が科せられたこと、あるいは五人以上の子をな

し、子供たちが一定の年齢に達したら、父親を早々に隠居の身とし、税制面等で優遇した規定などは、そうした想像を裏づけてくれる。

ただしせっかくな人口が増加しても、それを政府が把握しておらねば、国庫を潤すことにはならない。人口管理のシステム、具体的には戸籍制度が充実してきていたことも、《二年律令》からは窺える。たとえば責任能力の有無を示す基準。漢よりも以前、秦の時代にも、幼少の者には責任能力がないとされ、刑罰の適用から除外された。その際に基準とされていたのは身長で、一四〇cmくらいが目安となっていた。ところが《二年律令》では、基準が年齢に変わり、十歳未満が対象となっている。身長はその都度測定すればよく、常に確かな数字が得られるが、年齢を目安とするのなら、その者が何歳であるのかを把握できる裏づけがなくてはならない。戸籍制度の充実、その規則的な運用が、基準が身長から年齢へと変化する際の大前提となる。

子供が成長すると、男子は二十歳で税役を負担しはじめるが、女子の場合は十二歳で一人前として扱われることもあった。十五歳の女性を歩き遅れだとする史料もあり、早婚の傾向が見られた。伝統中国において、法律上での妻の地位は夫に劣るが、《二年律令》でも

それは当てはまる。正妻以外にも妻を持つことが認められ、「後母」「仮母」「主母」など、様々な「義理の母」が法文の中で規定されていた。

男女の差違は、刑罰適用においても認められる。磔刑や腰切り刑、足切り刑は女性に適用されなかった。また女性に課せられない刑罰としては、腐刑（男性器切除の刑）も挙げられる。これは後の時代、死刑の代替刑とされ、『史記』の著者、司馬遷もこの刑を受けた。しかし《二年律令》によると、本来は強姦罪のみに適用された刑であつたらしく、犯罪の性格上、女性に科刑の対象となり得ない。これまで、腐刑に当たる罪を女性が犯したとき、いったいどのような処置が加えられたのか、懸案となっていたが、そうした疑念を抱く必要はないことになる。《二年律令》から得られた新知見の一つである。

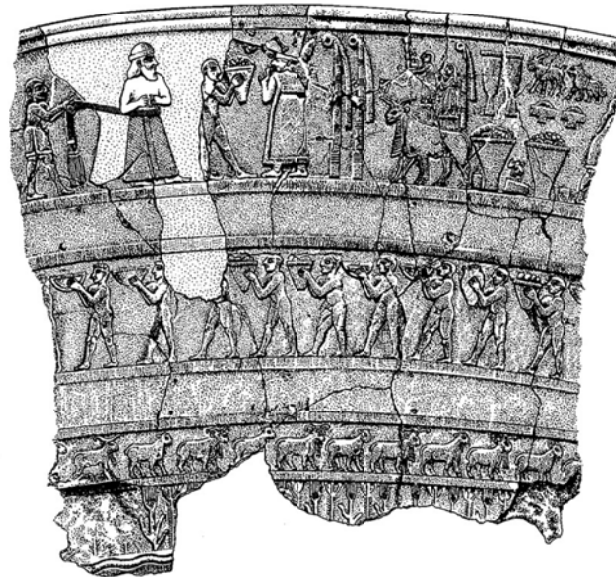
図像からみた古代メソポタミアの王権

前川和也

メソポタミア最南部地方でウルク期最末期（前四千年紀末）にシュメール人の都市国家が成立してのち、前一六〇〇年頃バビロン第一王朝が崩壊するまでの初期メソポタミア時代に、王権はどのように図像表現されていたのだろうか。

ウルク都市国家成立期の作品「ウルカの大杯」（下図）をとりあげよう。大杯の最下段には麦と亜麻が、つづく段には山羊と羊が描かれる。麦と亜麻（かつて推定されていたようにナツメヤシではない）によって耕地で栽培される全植物が代表され、つづいて山羊に先導される羊の群れが示されているのであろう。その上段では、農業や牧畜の諸産物が運ばれている。これらはウルクの女神イナンナに届けられるのである。「大杯」最上段に、イナンナ神殿の前でイナンナあるいは彼女に仕える女神官が立ち、男性を出迎えている場面がみえるからである。ざんねんながら、問題の男

性図像の大部分は欠損しているのであるが、この人物こそウルクの支配者であったことは、まちがいないであろう。大杯は、神のために支配者が人間を指揮して土地を耕し、また家畜を飼う体制、すなわち国家組織ができあがったことを宣言しているのである。いわば



大杯は「文明を担う王」を描いている。（文明成立のマニフェスト作品「ウルカの大杯」は、二〇〇三年四月、米軍が「文明を守る」ためにバグダードに侵攻したさい、なにもものかによってイラク博物館から略奪され、一時行方不明になった。）

のちのメソポタミア文学にみえるイナンナとドウムジ神のあいだの聖婚儀礼では、支配者がドウムジを、女神官がイナンナを演じるのであるが、「ウルカの大杯」でも聖婚儀礼が描かれていてと解釈されることもある。「ウルカの大杯」に登場していたはずの支配者は、「神に仕える王」であった。

ただそれは、よくいわれるように、メソポタミアでは王が聖職者を兼ねていた、あるいは聖職者が王になったということではない。おそらくこの解釈は誤っている。

初期メソポタミア時代のさまざまな図像から、王が世俗的な役割をはたしているさまを容易に読み取ることができる。たとえば「ウルカの大杯」と同時代の円筒印章では、王が敵を殺戮し、あるいは捕虜としている。初期メソポタミアの支配者は「戦う王」だったからである。前二五世紀ラガシユ出土の浮彫り「禿鷹の碑」では、エアンナトウム王が楯兵と槍兵で構成される密集部隊の先頭になって、あるいは戦車を駆って、

敵を粉砕していた。王は軍の指揮者なのである。またメソポタミアの支配者は「狩をする王」でもあった。

「ウルカの大杯」と同じ頃のウルク王は、沼沢地で野豚などを狩るだけでなく、ライオンとも槍や弓で戦っていた。西アジアでは、はるかこの時代まで、ライオン狩りが「王者のスポーツ」とみなされるであろう。王は「建設者」でもある。神殿のプラン図を膝に広げているラガシユのグデア王（前二二世紀）像をみればよい。また王は、頭でバスケットを運ぶ人物としても表現された。前二二世紀のウル王ウル・ナムム浮彫りや一九世紀のハンムラビ法典浮彫りでは、王は神から測量のためのポールと縄を与えられている（あるいは示されている）。おなじ浮彫りのなかで、ウル・ナムムはつるはしを手にもって、人々とともに作業現場にでかけていくであろう。

メソポタミア王は、家の代表者であり、大所領の経営者でもあった。頭にバスケットをかついで運ぶウル・ナンシエ王を描いたパネル（前二五世紀）の上段では、王が子供（男子にかざられる）や側近者の前でひとり椅子にこしかけ、酒杯を挙げていた。王の身体がだれよりも大きく描かれていることは、いうまでもない。

他者認識の思想史

阪上 孝

私の定年退職の講演会は、「他者認識の思想史」をテーマとし、啓蒙時代の他者認識について私の報告、人類学における他者像の変貌についての田中雅一さんの報告、浅田彰さん（経済研究所）にコメントを、井狩弥介さんに司会をお願いするという、シンポジウムの形式で行なった。人文研の柱が共同研究であること、定年を迎えたのが私一人で少し寂しかったことを考えて、異例ではあるが、このような構成を取った。私の報告では、一八世紀フランスにおける他者認識の展開を取り上げた。

一八世紀のフランスでは、キリスト教の神学的世界観が弱まったこと、宣教師や貿易商人によって外部世

界の情報が数多くもたらされたことによって、他者認識が大きな展開を見せた。啓蒙の知識人たちの他者像の主な源泉になったのは、アメリカの原住民、オリエント世界、中国である。アメリカ原住民からは、法や所有によらずに有徳で幸福な暮らしを送る「高貴な未開人」という他者像が紡ぎだされ、ルソーやデイドロの文明社会批判の契機を提供した。オリエント世界から抽出された専制的支配のモデルは拒否すべき他者像であり、モンテスキューがルイ一四世以後のフランス社会にたいして加えた批判の原点であった。中国の統治からは、皇帝が自然の法に則して支配する「合法的専制」の観念が抽出され、ケネーはそれにもとづいて行政の改革を構想した。これらの他者像はフランス社会を映し出す鏡としての役割を果たしたのである。

一八世紀の第四四半期になると、他者像をめぐる「哲学的」議論から、調査と観察にもとづく「科学的な」他者認識に重点が移る。ヴォルネーがエジプト・シリアの調査旅行にもとづいて書いた「エジプト・シリア紀行」は、その最初の産物である。さらに一七九九年には「人間観察者協会」が組織され、そのもとでド・ジェランドが未開社会の人類学的調査のための質問票を作成する。こうして他者認識は科学的になるが、それは文明の進歩という枠組みのもとで可能になった。

私の数量経済史研究

山本有造

サイドはヴォルネーをオリエンタリズムの創始者と位置づけたが、一九世紀になると、ヨーロッパの他者像は、文明の進歩を尺度として、文明国、半開国、未開国として整序されることになる。他者像の科学化は、他者が異質な存在としてもつ衝撃力、ヨーロッパの自己批判を促す力が失われていく過程であった。

私の報告に続いて、田中さんが人類学における他者が未開社会から農村へ、さらに都市のマイノリティーへと変貌する過程を取り上げ、他者との距離の問題を論じ、浅田さんが両報告へのコメントを加えた。

他者認識の思想史はこれからも考えつづけていこうと思っている主題であり、その点でも有益で刺激に富んだシンポジウムであった。ご協力いただいた三氏に心からお礼を申し上げます。

「経済史」とは何か。それを対象から限定すれば、人間の経済生活を対象とする歴史分析の一分野であり、「歴史学の一分科としての経済史」が定義される。しかし、それとは別に、方法的特性によって経済史を定義すれば、経済学的方法を歴史現象に適用する科学、「経済学の一分科としての経済史」という特定分野が設定される。社会史と歴史社会学との関係を模して、われわれは後者の経済史を仮に「歴史経済学」と名づけよう。ただし、「歴史学派経済学」との混同を避ける意味からは、「応用経済学としての経済史」と呼ぶほうが良いかもしれない。

こうした歴史経済学の手法が、経済理論の拡大、実証手法の開発、コンピュータの応用によって、その科学性と応用性を広く獲得するにいたったのは、それほど古いことではない。その現代的起源は、一九六〇年代アメリカ経済史学界における「新しい経済史

(New Economic History) あるいは「クリオメトリックス (Cliometrics)」あるいは「計量経済史 (Econometric History)」の誕生に求められる。そうした動向の日本への受容は、はやく一九七〇年代に始まるが、日本においては、マルクス主義歴史学の伝統と、アナル派経済史および歴史人口学の影響とが相俟って、アメリカ流の計量経済史よりもその縛りを緩く、かつ前近代をも領域に取り込んだ「数量経済史 (Quantitative Economic History)」と、いう形で定着したといえる。一九七一年に発足した「数量経済史研究会」の活動、とくに同会が中心となって編纂した『数量経済史論集』(全4巻)あるいは『日本経済史』(全8巻)の刊行などがその成果である。

私が研究所に在任中の個人研究のテーマとした「日本植民地帝国の経済史的研究」は、こうした数量経済史の手法を用いて、日本および日本植民地の経済発展過程を分析することであった。そこでは、主にクズネツツ流のマクロ経済分析の手法を利用して、日本の貿易・国際収支分析、植民地朝鮮・台湾の経済成長分析あるいは「満洲国」経済のマクロ分析などに取り組んできた。

こうした、やや特異な社会科学分野を専攻したことは、人文科学研究所におけるもう一つの責務である共

同研究の主宰という点では、良かったとも悪かったともいえる。自分の狭い領域に入り込み過ぎないように用心してテーマを設定する結果、共同研究のテーマに関しては、多くの場合班長が一番の素人であった。その分、班員に素人が入ることにも寛容であった。私たちの共同研究は、常に素人集団から出発した。自分の狭い専門から半歩ずつ前へ出て手を繋ぎ合おう、というモットーが成功したか否か。その判断は、班員と共同研究報告の読者に委ねなければならない。

改革者としての薩摩藩

佐々木 克

明治維新史研究において、最も研究が遅れているのが、幕末の天皇・朝廷についての研究である。これにははっきりとした理由がある。戦前においては、天皇を歴史研究の対象とすることはタブーであったし、朝廷・公家の政治的動きを少し詳しく述べようとすれば、

彼等の無能ぶりを明らかにすることになり、吹き荒れる皇国史観のなかでは、朝廷と公家の実像を描こうにも、発表する場がなかったのである。

また戦後の歴史研究において、明治維新期の天皇と朝廷は、その存在さえもほとんど無視されるに等しい扱いとなった。「いまさら天皇や朝廷の実態を明らかにしたところで、なんの足しにもならない」とは、六〇年代半ばの歴史学研究会大会における、ある研究者の発言である。時代状況と研究者の意識が、阻害条件となっていたのであった。

さらにもう一つ理由があった。天皇と朝廷に最も接触が密であった、薩摩藩の研究が遅れていたことである。関白近衛忠熙と子忠房の夫人は、いずれも薩摩島津家から嫁いでいるように、近衛家と島津家はきわめて親密な関係にあり、天皇・朝廷にかんする情報が、リアルタイムで近衛から島津家・薩摩藩に届けられていたのであった。このことは『鹿兒島県史料 忠義公史料』全七巻で明らかになったのであるが、同書の刊行完結は一九八〇年であり、幕末薩摩藩研究は、実はこの時点からようやく本格的に出発するのである。

薩摩藩国父島津久光が朝廷に差出した意見書(一八六三文久三年十月十五日)に「始至尊、左右輔弼之公卿方、急度天下之形勢、人情、事変御洞察、永世不拔

之御基本相立候様、遠大之御見識相居り、聊之儀に御動揺不被為在処、專要之儀と奉存候。」(『孝明天皇紀』四)とある。ここで久光は、孝明天皇(至尊)をはじめ朝廷上層部の公家に「天下の形勢・人情・事変などを良く見通し、将来を見据えた、確固とした国家の方針を立てるべき見識を備え、いささかな事などに動揺することなど無いように」と、要望していた。言い方をかえれば、天下・人情・国家将来についての洞察と見識を欠き、ささいな事柄に動揺し自主的な判断が出来ないと、はつきりと天皇と公家を批判していたのである。

この意見書は、朝廷の朝令暮改の弊を指摘したものである。として、早く(戦前)から知られていたものである。しかし天皇・朝廷にたいする痛烈な批判の文としては読み解かれてこなかった。久光がなぜここまで言わねばならなかったのか、彼の危機意識と真意とを正しく理解出来なかったからであり、それは文久三年八月十八日政変が、久光の決意によって断行されたものであることが分かって、はじめて理解が可能となるものだったからである。久光・薩摩藩は前年来、朝廷改革を進言してきた。しかし実効は見えず、かえって攘夷強硬論者真木和泉らの「浮浪」に朝議が左右される始末となった。国家の危機を意識した久光・薩摩藩は政治

生命を賭けて政変を決断し、断行したのであった。政変が目指したものは朝廷・朝議の正常化である。そしてこの意見書で久光は、天皇と公家の意識改革によって、正常化した朝議・朝廷が維持されることを求めたのであった。以後も薩摩藩の朝廷改革への取り組みが続けられ、最終的に「王政復古」に至る。すなわち王政復古政府は、朝廷の根本的改革（朝廷旧体制の廃絶）を前提として成立したものであったのである。

インド学の共同研究ことはじめ

井 狩 彌 介

インド亜大陸の文明を専門として扱う研究者は、人文研ではわたしが一番初だった。したがって、人文研を特徴付ける共同研究を組織するにあたって、私の研究の中心となる古典インド文献の研究、すなわちインド学の共同研究を始めることになった。この共同研究を開始する時点一九八〇年代半ばには、日本のインド学で

は三〇―四〇代の年令層に活気がみなぎっていた。この世代にインド古典学の様々な分野、ヴェーダ文献、インド哲学史、仏教学、叙事詩、ヒンドゥー教、インド科学史などに国際的な研究水準に立つ優れた研究者が輩出しつつあった時期である。特に京都を中心とする若手研究者が意欲をもって研究を進めていた。文献学の仕事は、扱うサンسكريットなどの解読が簡単ではないこともあり、世界の一流の研究者と伍して研究の精度を高めるためには自分の専門を局限する必要性に迫られる。ひとりの研究者がインド文化史、思想史のさまざまな局面に広範な興味をもっていてもなかなか他の分野に手を広げる時間と余裕が生まれないのが実情だった。共同研究はこのような状況を打開するひとつの方向である。つまり、研究者のネットワークを組織して、専門家たちの研究の分業と協力の場を作ることだった。共同研究を進める意図は、研究者たちが互いに孤立しないで刺激をしあうことにあった。私たちの共同研究は、ひとつのテキストを会読しながら、異なった分野の専門家たちがそれぞれの持っている情報、見識を交換する場としてはじまった。インド学の分野では、その時点までこの種の開かれた共同研究の場がほとんど持たれなかったためと、参加した仲間たちが自分の枠を拡げること意欲的だったこともあって、

研究会への参加者の輪がどんどん拡がっていき、地域的に参加者がほぼ全国にまたがる拡がりが生れた。人文研には共同研究の参加者の旅費を出す余裕は全くなかった。ずいぶん遠方の方々も毎回手弁当で参加して下さるという主宰者名利につきる時期だった。研究の水準を下げないというのが共同研究を推進する条件のひとつだったが、参加する仲間の熱意のおかげでとてもいい研究会が続けられたと思う。カシミールの文献を扱った最初の研究会の最後の時期に、人文研に客員教授で来られたハーヴァード大のヴィッツェル教授がわれわれの共同研究会の水準と雰囲気をとても気に入ってくれて熱心に毎回参加し、この京都の共同研究会の存在を海外の研究者にことあるごとに紹介してくれた。それ以後、海外の一流のインド学研究者が日本に寄るとかならず京都のわれわれの研究会で報告してくれるという事態が習いとなった。そのような研究者のひとり著書のなかでわれわれの研究会に触れて、*"Ikari-ken" no yōu* 通称をそのまま使っていたことは懐かしい思いである。

おくりもの

宮 紀子助手は平成十五年度東方学会賞を受賞(十一月七日付)。

訃報

勝村哲也名誉教授(六六歳)は、九月十日逝去。

樋口謹一名誉教授(七九歳)は、二〇〇四年一月九日逝去。

人のうき

阪上孝(人文学研究部)教授は定年により退職(三月三十一日付)。

落合弘樹(人文学研究部)助手は辞任の上(三月三十一日付)、明治大学文学部助教に就任。

宇佐美文理(東方学研究部)助教は大学院文学研究科助教に配置換の上(四月一日付)、当研究所併任助教(文化表象研究部門、四月一日)と二〇〇四年三月三十一日)。

森時彦(東方学研究部)教授を当研究所長及び附属漢字情報研究センター長に併任(四月一日)と二〇〇五年三月三十一日)。

丸山宏名城大学農学部教授は、客員教授(文化研究創成研究部門、四月一日)と二〇〇四年三月三十一日)。

緒形康神戸大学文学部助教は、併任助教(文化研究創成研究部門、四月一日)と二〇〇四年三月三十一日)。

岡田暁生神戸大学発達科学部助教は、当研究所(人文学研究部)助教に転任(四月一日付)。

小関隆氏を助教(人文学研究部)に採用(四月一日付)。

エスポジト、モニカ氏を助教(東方学研究部)に採用(四月一日付)。

谷川穰氏を助手(人文学研究部)に採用(四月十六日付)。

山本有造(人文学研究部)教授は定年により退職(二〇〇四年三月三十一日)。

井狩彌介(人文学研究部)教授は定年により退職(二〇〇四年三月三十一日付)。

佐々木克(人文学研究部)教授は定年により退職(二〇〇四年三月三十一日付)。

小林博行(人文学研究部)助手は辞任の上(二〇〇四年三月三十一日付)、中部大学人文学部助教に就任。

東郷俊宏(東方学研究部)助手は辞任の上(二〇〇四年三月三十一日付)、鈴鹿医療科学大学鍼灸学部助教に就任。

〇お詫びと訂正
所報人文第五十号、二〇〇二年彙報(十六頁中段四行目)「横山俊夫(人文学研究部)教授は大学院地球環境学堂教授に配置換(四月一日付)」を、次のように訂正します。「横山俊夫(人文学研究部)教授は大学院地球環境学堂教授に配置換の上、ダブルアポイントメント制により当研究所(文化研究創成研究部門)教授両任(四月一日付)」。

海外での研究活動

加藤和人助教(人文学研究部)は、

文部科学省科学研究費補助金により、

一月六日大阪発、英国サンガーセンターに於いてゲノム研究についての調査研究を行い、一月十日帰国。

加藤和人助教(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月十四日大阪発、米国シエラトンホテル及び米国ヒトゲノム研究所に於いてヒトゲノム研究の現状に関する調査研究を行い、一月十八日帰国。

古松崇志助手(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、一月十二日大阪発、台湾国家図書館、故宫博物院図書館及び中央研究院歴史語言研究所図書館に於いて中華人民共和国・黑河流域の元環境資料についての調査を行い、一月十九日帰国。

高木博志助教(人文学研究部)は、一月二十日大阪発、梨花女子大学に於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」に参加、大田韓国政府記録所に於いて二十世紀の文化財保護史の調査を行い、一月二十三日帰国。

籠谷直人助教(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、

一月二五日大阪発、ロンドン公文書館に於いて一九五〇〜六〇年代の対日経済外交についての史料調査を行い、二月七日帰国。

中西裕樹助手(東方学研究部)は、文部科学省在外研究員旅費により、二月十日大阪発、首都師範大学に於いて敦煌学国際連絡委員会準備会に出席及び研究打合せを行い、二月十二日帰国。

高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省在外研究員旅費により、二月十七日大阪発、首都師範大学に於いて敦煌学国際連絡委員会準備会に出席及び研究打合せを行い、二月十九日帰国。

ウイッテルン、クリスティアン助教(附属漢字情報研究センター)は、二月十三日大阪発、台北恵日会館に於いて中華電子佛典協会成果発表会專題講演及び研究打合せを行い、二月二十日帰国。

池田巧助教(東方学研究部)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二〇〇二年三月一日大阪発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて西南中国のムニャ語についての記述言語学

的研究を行い、二月二八日帰国。

藤井正人助教(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月十四日大阪発、トリチュール、パニヤール、トリヴァンドラム及びティルネルヴェリ(インド)に於いてヴェーダ伝承の現地調査を行い、二月二十八日帰国。

菊地暁助手(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二月二日成田発、コペンハーゲン国立博物館、ノルウェー民俗博物館及びスカーセン民族博物館に於いて日本の民俗文化財保護に対する北欧の影響についての資料調査を行い、三月三日帰国。

宮紀子助手(東方学研究部)は、三月四日大阪発、文部科学省研究拠点形成費補助金により、ソウル大学校奎章閣及び高麗大学仁村記念館に於いて十五・十六・十七世紀作成の地図資料収集を行い、三月六日帰国。

古松崇志助手(東方学研究部)は、三月四日大阪発、文部科学省研究拠点形成費補助金により、ソウル大学校奎章閣及び高麗大学仁村記念館に於いて十

集を行い、三月六日帰国。

古松崇志助手(東方学研究部)は、三月四日大阪発、文部科学省研究拠点形成費補助金により、ソウル大学校奎章閣及び高麗大学仁村記念館に於いて十

集を行い、三月六日帰国。

五・十六・十七世紀作成の地図資料収集を行い、三月六日帰国。

。森本淳生助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二月十四日大阪発、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーに関する資料調査を行い、三月八日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月一日大阪発、山西省考古研究所に於いて先史遺跡の踏査及び出土遺物の調査を行い、三月九日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、三月六日大阪発、中央研究院資訊研究所（台湾）に於いて「The digitalization of Chinese News Contents」に出席及び論文発表を行う、三月九日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学技術振興調整費により、三月八日大阪発、マンダリンホテル及び国立シンガポール大学に於いて「アジアにおける生命倫理に関する対話と普及」シンガポール・ワークショップに出席及び研究発表を行い、三月十一

日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究部）は、二月二十日大阪発、ジャメク・マスジド（クアラルンプール）、マッキー・マスジド、カラチ大学、スインド州政府ワクフ庁、ジンナー廟、マンゴー聖者廟（カラチ）、パンジャーブ州政府ワクフ庁、タプリーギー・ジャマアト本部及びジャマアテ・イスラミー本部（ラホール）に於いて宗教事情の調査を行い、三月十五日帰国。

。稲葉穂助教授（東方学研究部）は、三月五日大阪発、コロンボ大学、ペーラーアニア大学及びコロンボ国立博物館に於いて仏教、イスラーム教の聖地崇拜に関する調査・資料収集を行い、ケーララ大学及びクイロン（インド）に於いて古代海上交易と宗教の伝播に関する調査・資料収集を行い、三月十五日帰国。

。村上衛助手（東方学研究部）は、委任経理金により、三月六日大阪発、国立故宮博物院に於いて清代檔案の収集、中央研究院中山人文社会科学研究所に於いて第九回中国海洋発展史研討会に

出席、中央研究院近代史研究所に於いて外交檔案の収集を行い、三月十九日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十三日大阪発、フランス・アルザス日本研究所に於いてアルザス・パリ国際シンポジウム「日本と東アジアの境界と文化創造」に出席及び論文発表、フランス国家図書館に於いて敦煌資料調査を行い、三月二三日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十六日成田発、大英図書館、ロンドン大学 SOAS 図書館及びヴァアチカン図書館に於いて新旧キリスト教ミッシェンの東アジアにおける出版活動に関する資料収集を行い、三月二四日帰国。

。大浦康介助教授（人文学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により、三月五日大阪発、カリフォルニア大学サンディエゴ校、チャールストン大学及びコロンビア大学に於いてアメリカにおける十八世紀研究（主にフランス文学・思想に関する）の現状調査

及びサド国際学術研究会（チャールストン大学）出席を行い、三月二六日帰国。

。中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、三月十四日大阪発、海豊県誌弁公室（中華人民共和国）に於いてシオオ語の現地調査及び資料収集を行い、三月二六日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、三月十六日大阪発、中央研究院歴史語言研究所に於いて「漢字智慧型編碼與應用」ワークショップに出席、中央研究院資訊研究所に於いて「Open Source Buddhist Reader」の打合せ、中華電子仏典協会に於いて大正蔵データベースについての打合せを行い、三月二八日帰国。

。東郷俊宏助手（東方学研究部）は、三月十九日大阪発、北京崑崙飯店、安国市生薬市場及び北京市内病院に於いて老中医臨床実技研修及び記録、生薬販売市場調査、臨床現場調査を行い、三月三十日帰国。

。フリーシユテユック、サビーネ外国人研究員（人文学研究部）は、三月二七日大阪発、ニューヨークヒルトンホテルに於いて Annual Meeting of the Association of Asian Studies に出席・研究発表を行う、四月二日帰国。

。辛珠柏外国人研究員（人文学研究部）は、四月十七日大阪発、韓国歴史研究会に於いて研究発表及び情報交換、国史編纂委員会に於いて植民地朝鮮における日本軍に関する資料蒐集を行い、四月二日帰国。

。加藤和人助教授（人文学研究部）は、四月二六日成田発、カンクン（メキシコ）カミノリールホテルに於いてヒトゲノム国際機構倫理委員会へ出席及び研究発表を行い、五月二日帰国。

。古松崇志助手（東方学研究部）は、京都大学教育研究振興財団助成金により三月二八日大阪発、北京大学中国古代史研究中心に於いて中国近世史研究のための漢籍文献史料調査を行い、五月八日帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、韓国咸陽綠色大学校の招待により、四月

三日大阪発、ソウル国立大学校科学文化センター主催のセミナーに於いて人文学における電算機利用についての研究発表の後、綠色大学校創設記念国際シンポジウムに於いて人文研と三才学林についての講演を行い、四月六日帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究部）は、文部科学省科学技術・学術政策局による「研究環境の国際化推進事業」の一環として、四月八日大阪発、ケンブリッジ大学に於いて、英文学術誌編集発行事業推進のための情報収集のち、四月十五日帰国。

。高木博志助教授（人文学研究部）は、五月十五日大阪発、全南大学校に於いて「五、十八光州事件文化運動シンポジウム」に出席及び報告を行い、五月十六日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究部）は、五月十三日大阪発、ソウル国史編纂委員会に於いて資料調査、延世大学校に於いて「ファシズム支配体制と民衆の生活相」国際学術大会に参加・発表を行い、五月十八日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教教授（附属漢字情報研究センター）は、五月十四日大阪発、オックスフォード大学に於いてT E I評議会の会議に出席及びテキストエンコーディングについての研究打合せを行い、五月二二日帰国。エスポジト、モニカ助教教授（東方学研究所）は、五月二七日大阪発、スタンフォード大学に於いて「The Rooms of Naitani」ワークショップに出席及び資料蒐集を行い、六月十日帰国。

。井狩彌介教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十一日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて第十二回世界サンスクリット学会に出席及び「現存ヴェーダ伝承の調査と研究」に関する研究総括打合せを行い、七月二三日帰国。

。藤井正人助教教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月十二日大阪発、ヘルシンキ大学に於いて第十二回世界サンスクリット学会に出席及び「現存ヴェーダ伝承の調査と研究」に関する研究打合せ・資料蒐集を行い、七月二四日帰国。

国立極東学院等に於いて道教・仏教に関する研究打合せ及び資料調査・蒐集を行い、九月三十日帰国。

。富谷至教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二八日大阪発、ライデン大学、ミュンスター大学、民族学博物館及びストックホルム大学に於いて「東アジアにおける法と習慣」に関する研究・教育打合せ及び出版打合せを行い、十月八日帰国。

。岡村秀典助教教授（東方学研究所）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、十月十日大阪発、中国社会科学院考古研究所に於いて文字瓦の調査打合せ、鄴城遺跡に於いて文字瓦の調査を行い、十月十七日帰国。

。籠谷直人助教教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月十二日成田発、ワシントンの国立公文書館に於いて「阪神華僑の国際ネットワークに関する研究」について、華僑華人に関する調査及び資料収集を行い、十月二十日帰国。

。山本有造教授（人文学研究所）は、十

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二七日大阪発、中国国家図書館に於いて新旧キリスト教出版活動に関する資料収集を行い、七月三十日帰国。

。高木博志助教教授（人文学研究所）は、八月二十日大阪発、ソウルプレスセンターに於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」公開討論会に出席し、八月二二日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、八月十六日大阪発、インドネシア独立記念塔、ポンティアナック虐殺記念碑、クチン英雄記念碑及びシンガポール終戦五十周年記念碑に於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」に関する研究交流・調査を行い、八月二六日帰国。

。水野直樹教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二四日大阪発、ソウル国史編纂委員会及び大田政府記録保存所に於いて植民地期法制関係資料調査・収集を行い、八月二九日帰国。

。石川禎浩助教教授（東方学研究所）は、

。月二八日大阪発、復旦大学を表敬・視察、和平飯店に於いて中国社会科学院中日歴史研究專家委員会との合同会議に出席及び事務局との打合せ、蒋介石生家等視察を行い、十一月三日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン助教教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、十月二九日大阪発、中華佛学研究所に於いて仏教情報ワークショップに出席、ナンシー大学に於いてT E I文字符号化WG会議及びT E I総会に出席、ラビエーゲン大学漢学研究所に於いて漢学研究打合せを行い、十一月十一日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、十一月六日大阪発、ハーバード大学及びエール大学に於いて講演及び中国小説・戯曲資料調査を行い、十一月十三日帰国。

。横山俊夫教授（人文学研究所）は、日本学術振興会科学研究費補助金により、十一月六日大阪発、ロンドン大英図書館に於いて、幕末期収集集節用集類の調査を行い、またオックスフォード大学

。文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月十三日成田発、ロシア国立政治・社会史アルヒーフに於いて中国文献調査を行い、九月二一日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月二二日大阪発、首都師範大学に於いて第二屆《三国演義》版本暨第二屆中国古典小説数字化研討会に参加・論文発表を行い、九月二五日帰国。

。安岡孝一助教教授（附属漢字情報研究センター）は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、九月二一日大阪発、英国図書館に於いて文字コードの歴史的資料に関する所蔵調査を行い、九月二七日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、九月二四日大阪発、ソウルの独立記念館、西大門刑務所等に於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」に関する研究交流及び調査を行い、九月二七日帰国。

。エスポジト、モニカ助教教授（東方学研究所）は、八月五日大阪発、コレージュ・ド・フランス図書館及びフランス

。東洋学研究所に於いて、大雑書研究について客員講義、十一月十七日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究所）は、十一月十三日大阪発、ソウル東国大学校に於いて明清史国際学術会議における講演及び討論を行い、十一月十六日帰国。

。高木博志助教教授（人文学研究所）は、十一月十三日大阪発、シャモニホテル（韓国）に於いて「批判と連帯のための東アジア歴史フォーラム」に参加、扶余市に於いて歴史的記憶をめぐるフィールドワークを行い、十一月十六日帰国。

。村上衛助手（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十七日大阪発、上海市博物館及び常習市に於いて近現代、武進県における労働問題・人口流動に関する文献調査を行い、十一月二十日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十一月十八日大阪発、エモリー大学に於いて「宗教紛争」国際会議に出席、カリフォルニア大学

パークレー校及びハワイ大学に於いて道関関係資料蒐集を行い、十一月二八日帰国。

。竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十一月十八日成田発、シカゴヒルトンホテルに於いてアメリカ人類学会に出席、フィールド博物館及びカリフォルニア大学パークレー校に於いて「人種」の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」に関する資料収集を行い、十一月二八日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究部）は、文部科学省在外研究員旅費により、十一月十九日大阪発、サンフランシスコ大学、ミシガン大学及びニューヨーク市立大学に於いて「変貌するポルノグラフィ」に関する文献資料収集及び研究者交流を行い、十一月二十九日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、十一月二七日大阪発、嶺南大学に於いて明代小説戯曲国際研究会に出席及び論文発表を行い、十一月三十日帰国。

。岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先

方負担）により、十一月十九日大阪発、遠東博物館（スウェーデン）に於いてアジア・ヨーロッパ考古学ワークショップ出席、デンマーク国立博物館及びギメー博物館に於いて一九二〇年代の中国における調査資料の再検討を行い、十二月二日帰国。

。佐野誠子助手（東方学研究部）は、文部科学省国際研究会派遣旅費（一部先方負担）により、十二月三日大阪発、香港バプテテスト大学に於いて第五回「文学と宗教」国際学術研究会に出席及び論文発表を行い、十二月七日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、十二月二日大阪発、ペンシルヴァニア大学に於いて国際集会《Crossing the Borders of China》に出席し、十二月十日帰国。

。船山徹助教授（東方学研究部）は、十二月二日大阪発、ペンシルヴァニア大学に於いて国際集会《Crossing the Borders of China》に出席し、十二月十日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、十二月九日大阪発、台湾大学東亜文明研究

中心及び国家図書館に於いて東亜伝世漢籍文献訳解方法国際学術研究会出席・論文発表及び中国小説・戯曲資料調査を行い、十二月十三日帰国。

。岡田暁生助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月十日大阪発、チューリッヒ市立図書館及びチューリッヒ大学図書館に於いてグランド・オペラに関する調査を行い、十二月二十日帰国。

。田中淡教授（東方学研究部）は、十二月十八日成田発、西安の大明宮含元殿遺跡に於いて大明宮含元殿遺跡保存復元プロジェクト専門家会議に出席し、十二月二十日帰国。

。森時彦教授（東方学研究部）は、十二月十七日大阪発、台湾中央研究院歴史語言研究所に於いて創立七五周年記念式典出席、学術講演及び資料蒐集を行い、十二月二十三日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究部）は、十二月十五日大阪発、国立シンガポール大学、マドラス大学及びマドラス高等裁判所に於いて宗教事情についての調査を行い、十二月二十四日帰国。

。大浦康介助教授（人文学研究部）は、十二月二二日大阪発、バリ島、ウブド、プリアタン及びオイスカ研修センター等に於いてインドネシアと東チモールにおける絵画制作支援及びパフォーマンス・アーツの調査を行い、二〇〇四年一月五日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究部）は、十二月二十九日成田発、イスラーム布教協会、アル・ホダー・インターナショナル、政策学研究所、国際イスラーム大学イスラーム研究所及び宗教省に於いて海外の宗教事情に関する調査を行い、二〇〇四年一月九日帰国。

。ウィットレン、クリステイアン助教授（附属漢字情報研究センター）は、二〇〇四年一月七日大阪発、中華仏学研究所に於いて仏教情報学ワークショップに出席、中華電子仏典協会に於いて研究打合せを行い、二〇〇四年一月十四日帰国。

。宮宅潔助教授（東方学研究部）は、文部科学省在外研究員旅費及び委任経理金により、二〇〇四年一月八日大阪発、大英図書館及び大英博物館に於いて木

簡及びその出土地に関する調査、スタイン・コレクション中の遺跡写真の調査を行い、二〇〇四年一月十五日帰国。

。田中雅一助教授（人文学研究部）は、二〇〇四年一月五日大阪発、バンガロール州立公文書館及びマイソール州立公文書館（インド）に於いて宗教事情についての調査を行い、二〇〇四年一月十七日帰国。

。富永茂樹教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年一月二四日大阪発、社会科学高等研究院、国立図書館、パリ市立歴史図書館（フランス）に於いて「一九六〇年代の研究」に関する資料収集及び研究打合せを行い、二〇〇四年二月一日帰国。

。藤井律之助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年二月一日大阪発、スウェーデン国立民族学博物館に於いてスウェーデン・ヘイムコレクションの調査を行い、二〇〇四年二月八日帰国。

。小牧幸代助手（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二

〇〇四年二月二日大阪発、ジャマイカ・ミッリヤ・イスラミーヤ大学及びイスラームの聖地等に於いて南アジア・ムスリム社会における「預言者信仰」の詩学と政治学に関する現地調査及び資料収集を行い、二〇〇四年二月十一日帰国。

。藤井正人助教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年一月十七日大阪発、マドラス、トリチュール、トリヴァンドラム等（インド）に於いてヴェーダ伝承の現地調査を行い、二〇〇四年二月十四日帰国。

。曾布川寛教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年二月五日大阪発、南京大学、南京博物院、南京市博物館、徐州市博物館、山东省博物館、山東石刻芸術博物館及び上海博物館に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、二〇〇四年二月十五日帰国。

。真下裕之助手（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二

。〇〇四年二月一日大阪発、アインドラ・プラデーシ州公文書館(インド)に於いて「前近代インドにおけるイスラーム諸国家制度の動態的研究」に関する文献調査及び資料収集を行い、二〇〇四年二月二日帰国。

。小関隆助教授(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年二月十一日大阪発、オックスフォード大学ボドリアン図書館に於いて「イギリス保守主義とディズレーリの記憶」に関わる史料調査・収集を行い、二〇〇四年二月二四日帰国。

。古松崇志助手(東方学研究部)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、七月二二日大阪発、北京大学中国古代史研究中心に於いて中国近代史研究のための漢籍文献史料調査、古跡文物調査を行い、二〇〇四年二月二九日帰国。

。麥谷邦夫教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年二月二七日大阪発、天后廟(台湾)に於いて調査を行い、二〇〇四年三月一日帰国。

。籠谷直人助教授(人文学研究部)は、

行い、二〇〇四年三月十六日帰国。

。稲葉稜助教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月五日大阪発、コロンボ大学、コロンボ博物館等に於いて南アジアにおけるイスラーム初伝伝説の研究に関する調査・資料収集を行い、二〇〇四年三月十七日帰国。

。森本淳生助手(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月八日大阪発、フランス国立図書館に於いてポール・ヴァレリーに関する資料収集を行い、二〇〇四年三月二一日帰国。

。横山俊夫教授(人文学研究部)は、本学教育改善推進費(学長裁量経費)国際交流事業計画の一環として、二〇〇四年三月十五日大阪発、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学に於いて本学との学術交流協定の現状につき関係教員と情報交換、ならびに英文学術誌編集発行事業推進のための情報収集のち、二〇〇四年三月二二日帰国。

。村上衛助手(東方学研究部)は、日本学術振興会委託研究費により、二〇〇

日本学術振興会委託研究費により、二〇〇四年三月二日大阪発、アジア研究協会(サン・ディエゴ)に於いて第五六回アジア研究協会大会に出席及び学術報告を行い、二〇〇四年三月七日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇四年三月五日大阪発、中国国家図書館に於いて漢字文献数拠庫に関する打合せを行い、二〇〇四年三月七日帰国。

。山室信一教授(人文学研究部)は、二〇〇四年三月二日大阪発、浙江大学日本文化研究所に於いて国際シンポジウム「明治時代の儒学」における基調講演、寧波市内に於いて資料調査を行い、二〇〇四年三月八日帰国。

。水野直樹教授(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月五日大阪発、アジア研究協会(サン・ディエゴ)に於いて第五六回アジア研究協会大会に出席及び学術報告を行い、二〇〇四年三月九日帰国。

。四年三月十五日大阪発、中央研究院近代史研究所に於いて中国近代史に関する史料収集を行い、二〇〇四年三月二三日帰国。

。麥谷邦夫教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月十五日大阪発、北京大学、社会科学院及び乾元館に於いて江南道教関係資料蒐集及び現地調査を行い、二〇〇四年三月二三日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省研究拠点形成費補助金により、二〇〇四年三月十六日大阪発、バルセロナ大学、バチカン図書館及びイエズス会古文書館に於いて Sangley 語文献に関する調査及び資料収集を行い、二〇〇四年三月二三日帰国。

。金文京教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月十九日大阪発、ハノイ国立博物館及び漢喃研究院に於いてベトナム所存漢文説話資料調査を行い、二〇〇四年三月二三日帰国。

。安岡孝一助教授(附属漢字情報研究センター)は、文部科学省研究拠点形成

。加藤和人助教授(人文学研究部)は、二〇〇四年三月七日大阪発、英国保健省及び下院科学技術審議会(連合王国)、ELSA GENプロジェクト(アイスランド)に於いて遺伝情報に関する調査・研究に対する倫理的・法的・社会的問題についての海外動向調査を行い、二〇〇四年三月十二日帰国。

。田中雅一助教授(人文学研究部)は、京都大学教育研究振興財団助成金により、二〇〇四年三月六日大阪発、ロンドン戦争博物館、在独米陸軍基地及び在伊米海軍基地に於いて軍隊展示調査、駐留米軍・在留米軍の調査を行い、二〇〇四年三月十三日帰国。

。富谷至教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年二月二九日大阪発、ライデン大学及びミュンスター大学に於いて中国法制史に関する研究打合せを行い、二〇〇四年三月十四日帰国。

。竹沢泰子助教授(人文学研究部)は、二〇〇四年三月九日成田発、ロンドン人種平等委員会事務局及びパリ大学に於いて人種関係の実態と法制の調査を

費補助金により、二〇〇四年三月十三日成田発、アメリカ議会図書館及びニューヨーク公立図書館に於いて文字コード関連文献の所蔵調査を行い、二〇〇四年三月二四日帰国。

。東郷俊宏助手(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇〇四年三月十七日大阪発、北京中医研究院及び崑崙飯店に於いて老中医臨床技術の系譜に関する資料蒐集及び研修等を行い、二〇〇四年三月二四日帰国。

。ウィットテルン、クリステイアン助教授(附属漢字情報研究センター)は、二〇〇四年三月十七日大阪発、中華仏学研究所に於いて「XML Text Processing」ワークショップに出席、フランス規格協会に於いて TEI META ワーキンググループ・ミーティングに出席し、二〇〇四年三月二五日帰国。

。池田巧助教授(東方学研究部)は、四月一日成田発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて西南中国のムニャ語についての記述言語学的研究を行い、二〇〇四年三月二一日帰国。

外国人研究員

- 。辛 珠柏 成均館大学校BK21研究助教授
植民地期朝鮮における日本軍の研究
(文化連関研究客員部門)
受入教官 水野教授
期間 一月六日～七月三十一日
- 。FRUHSTUCK, Sabine カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授
現代日本社会の「軍隊」
(文化生成研究客員部門)
受入教官 田中助教授
期間 三月十七日～八月三十一日
- 。林 満紅 中央研究院近代史研究所研究員
貿易と台湾商人の興起 一八六〇年～一九六一年
(文化連関研究客員部門)
受入教官 岩井教授
期間 八月十五日～
二〇〇四年一月十四日
- 。王 維坤 西北大学文博学院教授
日唐文化交流の研究
(文化生成研究客員部門)

- 学社会学部教授
近代戦争の体験と記憶の研究
受入教官 富永教授
期間 十月十五日～
二〇〇四年五月三十一日
- 。桑 兵 中山大学歴史系教授
【梁啓超年譜長編】の研究
受入教官 井波教授
期間 十月二日～十二月四日
- 。池上英子 ニュー・スクール大学大学院教授、ニュー・スクール大学変動研究所所長
祇園祭の歴史社会学的研究
受入教官 高木助教授
期間 十一月十日～
二〇〇四年一月十日
- 。黄 寛重 中央研究院歴史語言研究所研究員兼所長
政策、技術與經濟 ―日治時期台湾漁業的發展與変遷
唐宋基層武力與基層社會的轉變 ―以弓手為中心的觀察
受入教官 高田教授
期間 十一月二十日～十二月十九日
- 。RUOFF, Kenneth James ホートラ

招聘外国人学者

- 受入教官 富谷教授
期間 九月十五日～
二〇〇四年三月十四日
- 。李 俊植 延世大学校国学研究院研究助教授
戦時体制期朝鮮社会に関する研究
(文化連関研究客員部門)
受入教官 水野教授
期間 二〇〇四年一月一日～
二〇〇四年七月三十一日
- 。DEEG, Max ウィーン大学組織神学研究助教授
【出三蔵記集】と【名僧伝】の僧伝研究
受入教官 船山助教授
期間 二月二日～二月二日
- 。TSCHUDIN, Jean-Jacques パリ第七大学LCAO教授
日本における近代演劇の誕生 ―明治期の日本演劇
受入教官 宇佐美教授・大浦助教授
期間 三月十五日～四月十一日
- 。黄 蘭翔 中央研究院台湾史研究所籌

- ンド州立大学助教授
「日本帝国」における紀元二六〇〇年祝典(一九四〇年)の研究
受入教官 高木助教授
期間 二〇〇四年一月五日～
二〇〇四年八月三十一日
- 。CHEN, Jue カンタベリー大学講師
初唐傳奇小説研究
受入教官 小南教授
期間 二〇〇四年一月十二日～
二〇〇四年二月十五日
- 。劉 苑如 台湾中央研究院中国文哲研究所副研究員
理與教・從《冥祥記》到《冥報記》的小説發展
受入教官 小南教授
期間 二〇〇四年三月三十一日～
二〇〇四年四月二六日
- 外国人共同研究者
。秦 小麗 陝西省考古研究所・助理研究員
日中戦争期の中国で発掘した考古史料の再検討
受入教官 岡村助教授

備處・副研究員
中国仏教寺院の平面配置の形成過程に関する研究
受入教官 田中教授
期間 八月一日～九月三十日

- 。WANG, Liping ミネソタ大学・準教授
駐防八旗と民族問題 ―清代の都市文化形成における滿漢關係の研究
受入教官 岩井教授
期間 八月六日～九月二日
- 。林 炳徳 忠北大学校人文大学史学科・副教授
漢代法制史の研究
受入教官 富谷教授
期間 八月十一日～
二〇〇四年二月二八日
- 。彭 建英 西北大学文博学院講師
中国西北地域の民族学の研究
受入教官 富谷教授
期間 十月六日～
二〇〇四年三月三十一日
- 。FERGUSON, Harvie グラスゴー大

- 期間 四月一日～
二〇〇五年三月三十一日
- 。韓 巨熙 国史編纂委員会・編史研究士
日本所在韓国史関係資料に関する調査研究
受入教官 水野教授
期間 四月十四日～十二月二十日
- 。阿 風 中国社会科学院歴史研究所・副研究員
中国明清時代における法律・裁判文書の研究
受入教官 岩井教授
期間 九月三日～十二月一日
- 。金 孝眞 ハーバード大学人類学科博士課程
「京都都心部における京町屋再生運動と地域アイデンティティの変化」に関する研究
受入教官 高木助教授
期間 九月十二日～
二〇〇四年九月十一日
- 外国人研究生
。李 永春

岸田吟香と近代中国

受入教官 山室教授

期間 四月一日〜九月十五日

。LAPTEV, Serguei

漢字文化の拡大に関する考古学研究

受入教官 岡村助教

期間 十月一日〜

二〇〇四年九月三十日

。DISTEFANO, Anthony

日本社会におけるケイ・レスピアン集団への暴力、ならびに集団内における暴力

受入教官 田中助教

期間 十月一日〜

二〇〇四年九月三十日

。楊 文勝

殷周青銅器からみた儀礼制度とその社会

受入教官 岡村助教

期間 十月一日〜

二〇〇四年三月三十一日

。AMES, Christopher

沖縄のアメリカ村 ―グローバルな軍事戦略とローカルの経済復興戦略の不安定な関係

受入教官 田中助教

期間 十月一日〜

二〇〇四年九月三十日

。朝 克図

プフ（モンゴル相撲）文化に関する文化人類学的研究

受入教官 田中助教

期間 十月一日〜

二〇〇四年九月二十九日

漢字情報研究センター講習会

二〇〇三年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月六日）

漢籍について

名古屋大学文学研究科教授

井上 進

漢籍目録の構造―漢籍整理の基礎

文学研究科助教 宇佐美文理

カードの取り方―漢籍整理の実践

梶浦 晋

第二日（十月七日）

工具書について

富山大学人文学部助教森賀一恵

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月八日）

文字コードとテキスト処理の歴史

ウィットテルン、クリスティアン

目録検索とデータベース検索

安岡孝一

漢籍データベースについて

高田時雄

漢籍データベース実習（一）

第四日（十月九日）

漢籍目録を読む

井波陵一

漢籍データベース実習（二）

第五日（十月十日）

NIJ総合目録データベースと全国漢籍データベース

国立情報学研究所教授 宮澤 彰

実習解説

梶浦 晋

二〇〇三年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月十日）

四部分類概説

宮宅 潔

中国目録学史（一）

時代状況と出版傾向の関係について

宮宅 潔

お客さま

一月十四日 天津社会科学歴史研究所

研究員 周 俊旗（森、石川が応接した）

一月二二日 関西日仏学館館長 フルニ

エ・ピエール（阪上が応接した）

一月二四日 中国社会科学院近代史研究所

所長 汪 朝光（森、岩井、石川、村上が応接した）

二月十八日 文部科学省研究振興局振興

企画課長 川原田信市他一名（阪上、

井狩、富谷、井波が応接した）

三月二七日 カール大学薬学部長・教

授 ムハンマド・オスマン・バーブ

リー（稲葉、真下が応接した）

四月二五日 テキサスA&M大学助教

王 笛（森、石川、村上が応接し

た）

七月二四日 日韓歴史共同研究委員会韓

国側委員 李 萬烈他六名（水野、

辛、韓が応接した）

十月二日 中国共産党中央党史研究室一

行 孫 英他五名（森、石川、竹

内、狭間が応接した）

十月三十一日 ドイツ・ハイデルベルグ大

学教授候補 ゴーテリンド・ミュ

ラー（森、石川、村上が応接した）

十一月十四日 韓国ソウル大学奎章閣視

察団代表者 宋 基中他十三名（森、

金、守岡が応接した）

十一月十四日 台湾中央研究院近代史研

究所副研究員 黄 克武（森、石川

が応接した）

十一月二十日 台湾中央研究院院長 李

遠哲（森、高田、富谷、岩井、林が

応接した）

十二月二七日 コレージュ・ド・フラン

ス教授 ピエール・エチエヌ・ヴィ

ル、フランス国立科学センター

研究員 ジェローム・ブルゴン（森、

高田、岩井が応接した）

十二月十三日 フランス国立極東学院院

長 Jean-Pierre DREGE' ヌイッ

日本研究所所長 Imela Hijya-

Krschneit 他三名（森が応接し

た）

二〇〇四年一月二七日 延世大学校国学

研究院一行 教授 方 基中他四名

（水野が応接した）

平田昌司

梶浦 晋

高嶋 航

安岡孝一

漢籍データ入力実習（一）

第三日（十一月十二日）

中国目録学史（三）

和刻本漢籍の特色について

鹿児島大学法文学部教授高津 孝

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十一月十三日）

現代中国書について

石川 慎浩

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十四日）

『東洋学文献類目』について

井波陵一

実習解説

梶浦 晋

二〇〇四年一月三十日 中国社会科学院
近代史研究所長 張 海鵬（森、
石川、村上、狭間が応接した）
二〇〇四年三月三日 台湾中央研究院
歴史語言研究所研究員 陳 弱水
（森、高田が応接した）

気懸かりな「江戸の虫たち」

遠藤 彰

どのような文明のなかで、虫たちがどのように語られてきたか。これは、狩蜂の野外生態学を探ってきた私の、「文明と言語」研究会における、「テーマ」であり、ファールブル『昆虫記』という言説の「逸脱ぶり」やユクスキユルの「環世界[Cyber]」の再評価などを報告してきたが、じつは「江戸の虫たち」が気懸かりである。江戸初期に土佐派の草木画の傍にやつとカマキリやキリギリスが蛙とともに登場する。やがて『本草綱目』が解読され、『和漢三才図絵』などに虫たちが網羅され、大名にも「博物教奇」が現れ、虫の真写に覚え書きが添えられる。そして若冲「池辺群虫図」や応挙「百蝶図」という、虫たちを主題にした絵が、すばらしい配置で描かれる。そこまではまあよい。さらに喜多川歌麿『画本虫撰』の狂歌を添えた「歌合せ」の洒脱な趣向、洒落本や狂歌・川柳などを含めて、さまざまな虫に寄せた「戯作(パロディ)」が、江戸後期の浮世に横溢した気配、これは他に類を見ない展

開である。西欧のロスチャイルド卿の「蚤狂い」もなかなかであるが、文化的なベクトルがまるで異なる。江戸文化の爛熟と云われるが、これこそは「粹」「風流」を超えて、というか、そこからズレた「風狂」な展開ではなかったか。ともあれ、江戸は、虫たちが生活の身近に豊かにいて、その気になれば、語りの脇役には事欠かず、共通したイメージを喚起する対象でありえた、「虫教奇」を可能にする文明であった。それにくらべて、明治「文明開化」の、虫を自然を顧みない「暴走ぶり」は、進化論や競争原理の導入などが拍車をかけるかたちになった。さいわい、この「暴走」への「反動」として「大正生命主義」などと呼ばれる潮流が生れた。虫がらみでいえば、ファールブル『昆虫記』が大杉栄などによって翻訳され、昭和初期の「昆虫学黄金時代」の引金になった。この「ファールブル・ショック」が日本の「虫教奇文化」の復興に作用し、それは戦争でいくぶん抑圧されるも、戦後の新たな「昆虫少年」を量産するのにも貢献した。しかし、このところの都市文明が虫の姿をますます遠ざけるのは、なんとも哀しい事態で、虫教奇文化の根底が怪しくなっている。この研究会では、江戸期の遊郭で交錯する「ことばの空間」を、『色道大鏡』や『難波鉦』などから読んできた。そこに草木虫魚はほとんど登場しない

ものの、「風流」や「粹」につながる「文化としての自然」が、人と人の関わり、駆け引きとして豊かに表現されている。「虫のリアル」を観察してきた私は、「粹」の境地にはほど遠いが、これを契機に「虫のパロディ」がなぜ江戸で成立したのかを考えると、現代の貧しさを逆照射したところである。

線装本の情報と記憶

武田 時昌

漢字情報研究センターのスタッフを中心とする共同研究班の班長を三年間務めた。パソコン通というわけでもない私が、漢字情報学の研究班を組織しようと思った趣旨は、「漢字と情報」や「漢字文化」で述べたから繰り返さない。新センターに着任した情報学者の研究紹介が中心であり、漢字情報学の第一歩を踏み出したというには程遠かった。しかしながら、彼らの研究を核として二十一世紀COEプロジェクトが立ち上

がったから、少しは貢献できたところがあったように思う。それ以上に喜ばしいことは、この研究班を発展的に継承して、安岡・ウイッテルン両氏が二つの本格的な漢字情報学研究会を発足させてくれたことである。おかげでこの春で晴れて班長を降板し、班員の一人に格下げとなり、やれやれと安堵のため息をついている次第である。

ところで、研究会が終わりに近づいた頃に、意外な訪問者が現れた。「らいふすてーじ」の編集をしている学生で、漢字情報学の共同研究について記事にしたので、インタビューしたいというのだ。どこでそのような情報を耳にしたのかわからないが、中国学と情報学の出会いに興味を惹かれたらしい。いつもはユニークな先生を紹介するコーナーだが、今回は思い切った研究会を中心にするつもりという。漢字情報研究センターでの研究をアカデミックに伝えたいとのことだ。企画のユニークさと学生の真摯な話しぶりが気に入って、班長としての最後の務めをすることにした。

二月の中旬だったが、三人の学部学生がテープレコーダーとカメラを持って取材にやって来た。彼らは質問をしつかりと準備してきており、そのうえ聞き手上手であったので、あれこれと楽しく談話して、気がつくとい時間以上も経っていた。これは編集がさぞか

し大変だろうなと思っていると、二週間足らずで原稿が仕上がってきた。その出来映えは見事なもので、思いつくままの雑談から読者に必要な情報だけが二頁に凝縮されていた。要約は、皮肉なことにコンピュータが最も苦手とする知的作業である。それだけに、彼らの編集能力に感心した。

ただし一カ所だけ間違いがあった。「線装本」と言ったのを「正装本」と記してあったのだ。カットに用いられた写真も科学史研究室の洋装本だった。どうやら死語になっていらいらしい。それを別の単語に置き換えながら、共同研究会でデジタル化によって失われるものを討議していた折りに誰かが語っていた言葉を思い出した。線装本の記載内容だけではなく、手触り、重さ、匂いといった情報をあますことなく内包した超薄型ディスプレイも将来的に技術開発が可能であるというのだ。線装本をめぐるだけで感じられる喜びは、何とも言葉で表現できないものであるが、いつまでも記憶に残っている。一字違いの誤りは、どんなデジタルブックが開発されても、その記憶まで再現することはないぞと暗に言われているような気がして、思わず失笑してしまった。

なお、できあがった四月号の雑誌を見ると、差し替えたかどうかとだけ付言した写真は、「書庫内に並ぶ

線装本」となったものの、正装本？ だったのはご愛敬というものである。

私が班長になった理由

菊地 暁

所報人文の編集委員が、何を考えたものか「共同研究の話題」執筆を依頼してきた。おそらく私が「身体の近代」班の「班長」を務めているからだろう。ここで恐ろしい告白をすると、私は「身体」の専門家でもなんでもない。その私がなにゆえ「班長」になってしまったのかというと、不遜を省みずにいえば、「もうちょっとやりようがあるだろ」という感覚に突き動かされ、魔が差したためだ。

この感覚は「助手」という特権的な地位に由来する。「助手」の役割の一つに研究班の「お世話係」があるが、その「お世話係」には研究班のコンディショニング時に「班長」以上にハッキリと見えてしまうのだ。も

っと露骨にいえば、ヒラ班員の「テンションの低さ」と対峙するのはほかならぬ助手である。入試シーズンに研究会を開催すれば「人文研はヒマでいいよね」とイヤミの一つもいわれ、それでもスマイルを忘れずにヒラ班員との連絡を務める助手とは、班員の状態をリアルタイムに観察し得る格好のポジションなのだ。

ならば、「お世話係」が「班長」を兼ねたほうが手っ取り早いのではないか。そう思ってしまったのが運の尽き、「身体の近代」班を主催することとあいなつた。こうして、「身体」に関してズブの素人の班長を経験豊かな班員たちが奇ってたかかって啓蒙するという、「身体の近代」班が転がり始めてしまったのだ。

班の運営にあたって試みた小細工は少なくない。正式班員の所内への限定、メーリングリストやホームページの活用、班員によるリレー講義の開催、等々。これらの小細工は結局のところ、「時間」をはじめとした研究上の資源を、コミュニケーションの確立に向けていかに効果的に配分するのか、という課題に収斂したように思われる。

いまさらいうまでもないが、昨今の大学改革の結果、事務的・教育的負担の激増は研究者が実際に集って議論することのコストをいや増しに増している。加えて、さまざまな分野の優秀な研究者が京都盆地を中心とし

た狭小な地理的空間に密生している、という共同研究を支えたエコロジカルな条件が、交通・通信技術の革新により掘り崩されつつある状況も見逃すことはできない。いずれにしろ、共同研究をめぐる状況がドラスティックに揺れ動く最中、ありし日の共同研究スタイルに固執するのはせんなきことだ。

そろそろ紙数も超過したので、いくつもの前提条件の説明をすつとばして先を急ごう。「研究会」を開いて「論集」をまとめるというオーソドックスな共同研究スタイルが、メディア空間の変容とともに相対化されなければならぬ、というのが私の暫定的な見通しだ。生身の人間が顔を合わせる以外に議論の手段がなく、論集を編む以外にアウトプットの手段のなかった時代は、とうに過ぎ去ったといつて過言ではない。

なぜ「研究会」なのか、なぜ「論集」なのか、積極的な説明が求められてしかるべきだ。逆にいえば、研究者が生身の身体をつき合わせて議論することによってしか得られないもの、その水準に明示的に特化していくことが、研究会を開くことのコストが際限なく騰貴する昨今の研究環境において、切実に要求されているのだ。

と、ここまでエラそうな御託を並べてしまったが、実際の「班長」業はやはり生半可なものではなかった。

山積みの課題と班長の能力との間に横たわるマリアナ海溝よりも深い亀裂に、正直、途方に暮れる毎日だ。ただそれでも、やせ我慢として我慢を我慢をもらえば、「班長」というポジションを経験することは、「ヒラ班員」というポジションに戻った時に少なからぬフィードバックを与え得るものだ。希望的観測として、そう思っているのだが。

ためにならないはなし

藤井律之

現在、三国時代の出土文字資料の研究班では、本研究所蔵の魏晉時代の石刻拓本を讀了し、湖北省の張家山より出土した漢簡の中から、二年律令を會読している。前漢草創期の律令であり、江湖の研究者の注目を集めている資料ではあるが、文章が難解で、また、整理小組による簡の配列にあまり信用がけないことなどがあまって、一回の研究班で一本の簡を讀み終

えることすらできないことがままあるし、訳を確定できず、複数の解釈を提示しなければ場合ならないもある。

また、研究成果として、讀了した部分を東方学報に掲載すべく、班長たち数人とで原稿を作成し再検討しているところであるが、その段階でも当然議論は紛糾する。その一例として、二〇三簡の「知人盜鑄錢、為買銅・炭、及為行其新錢、若為通之、與同罪」なる一文を挙げよう。この部分は「他人が錢を不正に鑄造するのを知った上で、銅や炭を買う、およびその新錢を使ったり、もしくは通錢した者は与同罪」といった訳ができるであろう。しかし、三度にわたってあらわれる「為」を、いずれもくどくどと「ために」と讀み下すべきか否かで紛糾したのである。

しかし、私が疑問に思うのは、そもそもなぜ「為」を三度も繰り返す必要があるのか、という点である。かりに「ために」と讀むとした場合、「為買銅・炭」の部分は「不正鑄造者のために銅・炭を買ってやる」というニュアンスをこめるために「為」が記されているのだとすればまだ理解できるとしても、後段「為行其新錢」「為通之」の「其」「之」は「不正鑄造者」「不正に鑄造された錢」を指していることは明白なのであって、不正鑄造者の「ために」といっいち付け加

える必要などあるまい。とかくこの三度あらわれる「為」は不自然に思われるのである。

実は上記の様な疑問を抱いたのは、再検討をしたいた同時期に、研究班においても類似の不自然な句づくりをした律文を會読していたからであった。二六八簡の「郵人勿令徭戍、毋事其戸、毋租其田一頃、勿令出租・芻粟」である。否定詞が四度もつかわれ、しかも否定する内容も重複する（徭戍と事其戸、租其田一頃と令出租・芻粟）。

現段階では、どの様な意図によってかかる不自然な構文が生じたのか、恥ずかしながら明らかにするにはいたってはいないのであるが、ともかく、われわれの研究班は、以上のような反芻を繰り返しつつ、少しずつ訳注をすすめている状況である。この小文が、今後の二年律令研究に裨益するか否か—いや、ためになるのかならぬのかは、もう少し、二年律令のみならず、他の律文の不自然な構文を再検討した後に明らかにするであろう。

ある史料調査の思ひ出

谷川 穰

数年前のある夏の終わり、私は半年ほど追いかけていた史料の所蔵者に、ついに電話でアポイントをとることが出来た。受話器を置くなり、軽い興奮のうちに研究室を飛び出し、三時間ほどかけて滋賀県の某所へ足を運んだ。個人宅へお邪魔するのだから、墓荒らしのような無礼があつてはならない。最寄駅のそばでお茶の葉を買い、「つまらないのですが」と差し出す準備も整え、「お宝」にガツつきそうな気持ちを鎮めるのだ。

目的地についた。中学校の校庭の裏側に、生い茂る雑木に隠されたかのように、それは建っていた。吹けば飛ぶような木造の、「あばら家」という言葉は此処のためにあつたかと思わせる佇まい。玄関には「工房」と書かれた小さな看板がかかっており、玄関の引き戸は開けっ放しであった。本当に此処なのか？ 恐る恐る足を踏み入れると、米粒や菓子パンの袋、スバゲティ（なぜ？）、新聞の折り込みチラシ、その他ありとあらゆるゴミが散乱し、舞い上がる埃とむせ返る

臭いに、私は晩夏の日差しとは全く無関係の汗が滲むのを感じた。「ああ、いらつしゃい」という声にも、しばらく答えられなかった。七〇歳位と思しき男性が、肌着姿で奥から現れ、その床に腰をおろした。「先ほど電話した者ですが」「わかつてますよ、他に誰がくるの、こんなところ」ただ者ではない。足元のゴミの掃除を申し出てみたが、余計なことをしなくてよい、と釘を刺された。痩せてはいたがその眼光は鋭く、年寄りへの憐憫なら御免だと訴えていた。もはや「あばら家の史料所蔵者」ではなく、「砦の主」であつた。私はしばらく「主」の身の上話を聞き、また私自身の氏素性を、尋ねられるままに話し込んだ。

どれくらい経つたか知れぬ後、忘れかけていた目的のものと対面することになった。そこには明治初期の一僧侶についての、著作物や新聞記事、調査用ノートや書簡、生原稿が段ボールに詰め込まれていた。「主」の御父上が社会学者として一九三〇年代に集めたものに、その死後に譲り受けた友人が終戦までに調査・追加したのだという。少し調査者としての平静を取り戻した私は、順次その文字史料群をめぐっていった。その中から、古い写真が二枚出てきた。若い口髭を蓄え、三つ揃えで決めたダンディな男性の姿。険しかった「主」の顔が、すっかり柔和になったのはその瞬間

であつた。御父上だという。若くして亡くなったのだが、と話した後、「この写真は私のものだからね」。そう笑った。

二枚の写真以外を譲り受け、今その史料群は人文研本館四階の片隅にある。「主」は今年一月、天寿を全うされた。それらを用いた大きな成果を示すことも叶わず、己の怠慢を嘆くばかりだが、せめて御父上の亡くなられた三〇代半ばまで、どうかご猶予を願いたい。そういえば、持っていたはずのお茶の葉はどうしたのだろう。手元になかったから、いつの間にか渡していたのだろうか。お飲みになったのだろうか。あるいは、「本当につまらないものだねえ」と、床に捨て置かれたのだろうか。それも、まあいいか。ホコリ高き「砦」の住人になったということだ。

中古ピアノとクラビノーバ

岡田 暁生

人文研に来て以来、色々な面で私の研究生生活は変わ

った。「研究に没頭できる（いまだきこんな職場は滅多にない）」、「優れた同僚から絶えず研究上の刺激を受けられる（これも有難い限りだ）」、「学生がいない（これは気楽であると同時に少し寂しい）」等々。だが一番大きな変化は音環境のそれだ。これまでの私の職場（非常勤先も含め）は、すべてが音楽がらみだった。音楽大学、文学部の音楽学講座、教育学部音楽科系等々。オーディオ装置は一通り揃っているし、ピアノも各教室には必ず一台は置いてある。研究室で勉強している時、あちこちから学生の弾くピアノの音がうるさいくらい聴こえてくる——これが今までの私にとって自明だった「職場の音環境」である。

そこにいくと人文研は本当に静かだ。読書や執筆には最高の環境である。ただ西洋音楽史研究を生業にしている以上、音を聴かないことには研究にならない。だから研究室にいる時は常時CDを聴くことになるのだが、これだけ音環境が静かだと、ボリュームを上げるのがためらわれる。というわけで、曲の静かな箇所ではよく聴けるように音量を大きくし、フォルティッシモのところでは周囲の迷惑にならないように音量を下げてという具合に、いわば「手動」でCDを聴く毎日である。

だがCD以外にも、音楽史研究者に必須の小道具

(あまり小さくないが)がある。ピアノである。曲の構造を分析したりする際にも、授業でのちよつとしたデモンストレーション用にも、あるいは演奏つきレクチャーなどをする場合にも、ピアノがなくては商売あがったり。昨年度末に何とか中古のグランド・ピアノを購入できないものか画策してみた。なぜ中古かと言えば、安いというだけでなく、ピアノは新品よりある程度弾き込んだ楽器の方が当たり外れが少ないからである。ところが……今の大学の規則では中古の備品を購入することは出来ないと聞いてがっくりきた。価格の基準が曖昧だからというのが理由らしい。仕方なくヤマハの電子ピアノ(クラビノーバ)を購入したのだが、しかしもちろんこれは「ピアノ」ではない。ところが職場の色々な人からは、「ピアノを買ったんですね」と言われてしまう。そのたびに「あれはピアノじゃありません! ピアノとクラビノーバは虫眼鏡と電子顕微鏡くらい違うもので」云々と説明するのだが……。いつの日か本格的なレクチャー・コンサートが可能なら「ピアノ」を備えることが出来るよう、皆様のご理解とご協力をお願いする次第である。

大文字

小 関 隆

仰々しく宣言するほどのことではないが、明日は大文字に登る。日頃の運動不足と体力減退を嘆く私に哀れを覚えたらしく、院生たちが企画してくれたのである。(オヤジ化)の自覚はかなり以前からもっていたが、危機感にも似たものを抱くようになったのは去る二月のことだ。オクスフォードでの二週間ほどの史料調査の間、フライトの疲れが一向に抜けず、根性のない消化器系が機能停止に陥ってしまったのである。イギリスでは元氣百倍になって昼も夜も活動しまくるのが常だったから、これはなんともショックであった。以来、「暖かくなったら大文字」が私の常套的な決意表明となった。吉田山ごときでばてた経験ゆえ、明日を控えて緊張する自分が腹立たしい。

唐突に思い出されたのが、良知力「青きドナウの乱痴氣」である。ご存知の向きも少なくないと思うが、ガンに倒れた著者の遺作であり(死後に何冊かの論文集が編まれてはいるが)、「あとがき」に記された日付の二週間後に世を去るという文字通り壮絶な条件の下

で完成された。一橋の学生・院生として良知さんとはささやかながら接点があったし、病をおしてキャンパスに出ている姿を見かけることもあったから、留学先のパーミンガムに計報が届いた時には、若輩者なりに重い気分になったものである。とはいえ、二〇代半ばの研究者見習いには、死の床で研究を仕上げるこの意味はやはりリアルにはわからなかつたのだと思う。帰国後に『青きドナウの乱痴氣』を読んだ時の正直な感想は、良知さんにしてはやや集中力に欠ける叙述だな、などというものであった。体力も、そして時間も、まだまだ充分にあると想定できた頃のことである。

運動不足の話から良知さんを想起するのが無礼千万であることは承知している。私の年齢くらいで衰えを語りたがるのも悪趣味だろう。とはいえ、良知さんほどの学識もセンスも気力もない私が多少でも仕事をしようと思えば(良知さんの水準をはるか遠いにして)、体力減退に歯止めをかけることはやはり無視できない課題であるに違いない。「身体の近代」班にわが身の規律化を委ねるか、あるいは、某同僚にならつて「エグザス」で汗を流すか、実はかなり真剣に頭を悩ませつつ、人文研での第二年度を迎えている。まずは明日の大文字である。さらなるショックとならぬことを願うしかない。

産学軍協同パラダイス

藤 原 辰 史

湯川秀樹は、一九四三年四月二九日の文化勲章受章直前の正月に、「科学者の使命」という文章を書いている。科学者は「片輪であることを自覚し」、「お互ひ同士如何に協力連絡すべきかを常に真面目に考へておなければならない」。しかし、「由来わが国に於ては近代科学の各部門が多かれ少なかれ独立して、それぞれ国外から輸入せられた」。いま、「大東亜戦争」の「総力戦」にこそ、日本独自の科学を打ち立て、「科学者」はその弊害を克服するときなのだ、と、湯川は言う。当然ながら、「科学も亦、国家総力の重要な根拠の一つであり、且つ軍事技術、産業等の諸方面と複雑な関連がある」という前提が湯川にはある。日本が誇るべき学者である(と学校教育で教わった)湯川秀樹のこの文章に、わたしは、ある種の既視感を覚えずにはいられない。

ここで、戦時中の「湯川先生」の文章を引用したのは、ノーベル物理学賞受賞者の汚点を暴いて自分の不才の怨念を解消するためではない。湯川の崇高な「使

「命感」は、決して、湯川だけのものではなかったのである。京都大学、否、全国の大学の多くの学者が、「大東亜戦争」にいやいやつきあわされていたのではなく——小林秀雄、三好達治、諸井三郎ら、音楽から文学まで、映画から物理学まで多彩な文化人が参加していた一九四二年七月の「近代の超克」座談会を挙げてもなく——むしろ、学問の危機、すなわち、専門分野の細分化、社会と学問の断絶の突破口として、「大東亜戦争」を厳粛に迎え入れたのだった。鬼気迫る文章には、「産」、「学」、そして「軍」を含めた産学軍協同のなかに、学問の豊かな発展への設計図を見る湯川の思いが託されているのである。

さて、昨年、京都大学が、京都市内のある会社のノーベル化学賞受賞者を、来るべき「産学協同」のシンボルとして、客員教授のポストに招いたことは記憶に新しい。化学者ではないわたしには、彼の研究がどれだけ優れたものなのか分らない。ただ、彼の講演ではしばしば「異分野との提携を」という言葉が出てくることから、彼自身現在の学問の危機に無関心ではないことは有名であるし、彼の「オヒトガラ」が「オカタイ」アカデミズムへのアンチテーゼであったことは否定できない。ところが、「世界の中で、愛を叫ぶ」総理大臣が「軍隊」に「格上げ」したいと切望す

る、「イラク派遣」中の自衛隊の新型航空機の受注が、

その会社に決まった今年の四月のニュースは、ノーベル賞受賞の一〇〇万分の一も報道されなかった。「元気都市」京都の、まだそれほど元気でない経済を支えるその会社は、そして、産学協同によって元気になるとうとする京都大学は、決して「ブッシュの大虐殺」から遠いところにはいないはずである。

湯川が夢見た産学軍協同は、すでに始動しているのである。カビ臭い人文研の書庫で、学問の危機脱出への熱意に満ちた、いまからみても水準の高い戦時中の先達たちの研究書や報告書を読むたびに、わたしたち自身の「科学者の使命」を、問わずにはいられない。今の学者は、もはや「戦争を経験していない世代」ではないからである。

（*湯川秀樹の「科学者の使命」については、京都大学工学部を二〇〇三年三月に退職された荻野見也氏のご指示による。詳しくは「戦争と科学を考える」(二〇〇三年十一月発行)

羊男の話す英語

池田 巧

カリフォルニア大学バークレイ校の周辺には旧書店が数軒あり、時間のある時にはよく散歩を兼ねて見て歩いた。わざわざ「旧書店」としたのは、我々が想像する専門書や古籍などを扱う古書店とは趣が異なり、店頭には学生のテキストや参考図書を中心にセカンドハンドの旧書が並び、売れ筋の新刊書も一〜二割引きの価格で販売している店がほとんどだからである。ボクはこの新刊割引で、もともと有名な日本の作家ムラカミの作品をいくつか買った。カリフォルニアの一般書店の店頭でカワバタやらミシマの作品を探するのは、Barnes & Nobleのような大型書店でもかなり難しいが、ムラカミならアメリカの人気作家の小説に混じって新刊書店の棚に常備されているから、かなりよく読まれているのだろう。

やがて A WILD SHEEP CHASE に登場する SHEEP MAN は日本語では怪し気な北海道訛り(のつもりでムラカミさんは書いているのだろうけど、田舎者の雰囲気表現としては悪くないが、ことばが全

然違う。だいいち「おいら」なんて言わない。「十二滝町」に遠くない北海道の下田舎で育った私が言うのだから、間違いない)を話すが、これを英語の文体で表現するのは至難の技と予想できる。で、読んでみて驚いた。こんな具合である：

“Youcanehereyesterdayafternoon?” said the Sheep Man. …ううむ。訳者の苦心に敬服した。

ムラカミ作品に登場する人物は、名前が不確かなことでも有名だ。それを補うかのようにムラカミは「ほく」「おれ」「わたし」「おいら」といった日本語に豊富な代名詞の同義語を使って無名の個性を表現し分ける。こうした日本語の文体における冒険を、翻訳では如何に表現しようとするのか、ボクにはとても興味深い。たとえば HARD-BOILED WONDERLAND AND THE END OF THE WORLD の原著では「ほく」の物語と「わたし」の物語が交互に平行して進行するけれど、英訳ではこの人称はもろろんどちらも「I」で、その雰囲気の違いを英語の表現に反映させる工夫をした形跡は見られなかった。やれやれ。

ところで、ムラカミの新作では、カフカ少年の物語はすべて一人称の現在形による文体が、主人公の若さと決意を暗示するのに対し、もうひとつの中田さん(カフカ少年の無意識の象徴)の物語は、第三者によ

る過去形で語られて、それらがやはり交互に進行していくのが印象的だ。まだ翻訳はされていないけれど、この明確な文体の違いは、きつと英訳でも面白い表現効果となって現れることだろう。中国語圏ではツウンシャアン チュンシユウと発音されるこの作家の、中国語訳の文体表現が今とても気になり始めている。羊男はどんな中国語を話すのだろうか？

大海に溺れて

佐野 誠子

初めて人文研を訪れたのは助手試験の時であった。面接の席では自分の研究がどんな細かい、小さい方向へ向かっているとの手痛い、しかし、非常目的を射た指摘を頂いた。今後の研究をどのように進めていくか、面接の場でその問いに満足に答えられなかった私をわざわざ採用してくれたのは、人文研でその答えを探せということなのだろうか。

実際、人文研、そして京都という学術風土は私にと

会という、専ら関西で開かれている学会である。この学会はもしかしたら他の人文研の研究班よりも私の研究関心に一番近いかもしれない。そうはいっても、恠異学会の諸メンバーは日本史学、日本文学など日本のことを専門にしている人が大半で、時にはメンバー間で当然のように共有されている基礎知識が私にはチンブンカンブンであったりもする。

決して井の中の蛙であったわけではない。大海が存在することは知っていた。ただ東京にいた頃は大海に泳ぎだしていく時間的、精神的余裕がなかったのである。こうして京都で半ば強制的に大海で溺れながら、新たな泳法を習得しようと模索するのも研究者人生の中で貴重な時間なのかもしれない。

って大きな新しい知の海であった。私は中国文学科に所属し、魏晋南北朝時代に書かれた怪異の記録を専ら取り扱った書物―志怪について研究らしきことをしてきた。先日人文研を訪れたある外国人の先生が志怪の専門家なんて世界に二十人もいないのではないかと言われたくらい、中国文学の中でもマイナーな分野である。それでも、東京で勉強していた時は中国文学に関する様々なテキストを読んできた。

人文研の東方学研究部では、何故か純粋に中国文学に関する研究班は開催されていない。現在私が参加している研究班でも私が所属していた中国文学の授業ではまず読まない種類のテキストを扱っており、目下悪戦苦闘している。

また人文科学研究部の研究班にも参加する機会を得た。私はこれまで中国学以外の人文系の学問をしている知人が非常に少なかった。それが急にこった煮的に様々な専門分野の人達と会話をする機会が得られるようになったのである。異なる知識のバックグラウンドを持つ人達との会話は、緊張と興奮の両方を与えてくれる。そして、自分の知らない世界がこんなにも広いものなのかと愕然する。

それに加えて、京都に来て人文研とは関係のない学会にも参加するようになった。名前を東アジア恠異学

〈人文科学研究奨励賞〉

理化学年代と「考古学的年代」

―山内清男の限界

穴沢 啄つば 光ひかり

現在の日本考古学界の大きな問題のひとつはAMSによる放射性炭素測定年代と従来の「交差年代」法によつて推定されていた弥生時代の開始年代の食い違いである。在来の研究法では紀元前五〇〇年ごろとされていた弥生文化開始年代がAMS法によるとさらに約五〇〇年ほど古くなることとなる。考古学研究者の一部にはこの結果を受容することに非常な違和感があるようであり、学界では大きな論議を呼んでいる。

理化学的年代測定法と伝統的な「考古学的」方法で推定された年代とが大きく食い違つてしまい、そのどちらを真実の年代として採用するかという問題は一九四九年に放射性炭素年代測定法が開発され、欧州や日本の考古学的遺物にそれが適用された際に起つた。理化学年代測定値に対して強烈な拒絶反応を表明したのは日本先史学の大御所であった山内清男であった。

山内は、進化的形式学、交差年代法……による先史

時代土器の研究を推進し、一九三〇年代後半に今日の日本の縄文土器の相對編年体系をほぼ完成させてしまった偉才であった。たとえ地域を異にしても同一形式で同じ相對編年上の位置にある考古学的遺物は常に同じ歴年代の所産である……彼はこの古典的な原理を「考古学の正道」と呼び、他の不確実な根拠にもとづいてこれに異議を唱える試みに強く反発した。東北の縄文遺跡から宋銭が出土したという伝聞にもとづき、東北では歴史時代まで縄文文化が存続したのではないか、という喜田貞吉との有名な「ミネルヴァ論争」はこの問題がキーポイントであったのである。

この論争の結末は結局、山内らの「編年学派」の勝利に終わったことは広く知られるとおりである。山内の主張が学界に広く認められるようになった結果、山内は彼の方法に絶対の自信をいだくようになり、形式学と交差年代法以外の方法で先史年代の問題に容喙するような試みには強く反発するようになった。

一九六〇年ごろのことである。東大人類学教室の山内のところ、当時函館市立博物館の館員であったT氏が訪ねてきた。ひごろ偏屈で気難しかった山内も資料や情報をもたらしてくれる地方研究者の来訪は大歓迎で、Tも山内に上機嫌で迎え入れられた。

Tはその少し前、駒ヶ岳火山の麓にある尾白内貝塚

を發掘し、その報告を薄い報告書にまとめていた。貝塚の貝層からは続縄文文化の土器が出土し、そのすぐ上を駒ヶ岳の火山噴出物が覆っていた。地質学者によれば、この層は一七世紀の寛永年間の火山活動による堆積物とされていた。Tはこれにもとづき、尾白内貝塚の形成年代を一七世紀より少し以前ごろ……と推定した。

Tから献呈されたこの尾白内貝塚の報告書に目を通した山内の表情はみるみる一変した。山内の先史編年体系によれば続縄文土器は縄文文化に後続する北海道独自の文化的所産で、日本「内地」の弥生・古墳文化に年代的に平行する「はず」である。これが江戸時代初期にまで年代的に下がるようなことは絶対にはありえない。地質学者のいうことを妄信してこのようなタワけたことをいうとはいったい何事であるか！

怒り心頭に発した山内は満面朱を注ぎ、すさまじい勢いでTを罵った。気の弱いTは真っ青になり、意識を失って卒倒してしまった。あわてたのは山内で、ロツカーの中から秘蔵のブランデーのビンを取り出し、Tの口にあてがいが、懸命に介抱したという。

後から考えれば確かに山内の見解はたしかだった。

このエピソードにみられるように、山内は「考古学の正道」以外の方法で先史文化の年代を推定しようとい

う試みに関しては激しい不信感をもっていたようである。放射性炭素年代測定結果に対して山内が激しく反対し、時代逆行的な「縄文文化三〇〇〇年説」をあえて唱えた理由も実にそこにあつたのではないか？

放射性炭素年代の測定値はこと相對年代に関する限り、山内の編年体系が基本的に正しいことを立証した。彼がつかまっていたのは縄文文化の絶対年代の枠組みを、海を越えて当時研究がまだ不十分でデータ不足だった大陸の先史文化のあやふやな年代推定値に結びつけたことであつた。山内が「考古学の正道」がいかなる条件下に、いかなる限界の下で適用可能であるのか——という方法的な問題を考慮しなかつたことが晩年の限界であつた——と筆者は考えている。

書いたもの一覧

(氏名五十音順)

●は単行本)

池田 巧

A word list of basic Tibetan cultural items in the Mu-nya language. 『論集：東・東南アジアの少数民族言語の現地調査』三(特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』の緊急調査研究」成果報告書) 二〇〇三年三月

●『中国語でコミュニケーション 発音・学習法編』

アルク 二〇〇三年四月

On pitch accent in the Mu-nya language. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area*. 252 二〇〇三年五月

『西南中国(川西民族走廊)地域の言語分布』レファランズ資料集 崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』(国立民族学博物館調査報告二九) 二〇〇三年六月

●『活きている文化遺産デルゲバルカン——チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』(共著) 明石書店 二〇〇三年七月

石川 慎浩

Anti-Manchu Racism and the Rise of Anthropology in Early 20th Century China. *Sino-Japanese Studies* vol. 15 二〇〇三年四月

李大釗接受馬克思主義與陳溥賢 中共一大會址紀念館編『中

国共産党創建史研究文集』

青年时期的施存統——日本小組與中共建党的過程 中共一大會址紀念館編『中国共産党創建史研究文集』 上海人民出版社 二〇〇三年六月

●丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第一・二卷(共訳) 岩波書店 二〇〇四年一・三月

モスクワの図書館と文書館 『漢字と文化』二号

初期コミンテルン大会の中国代表(一九一九—一九二二年) 森時彦編『中国近代化の動態構造』 京都大学人文科学研究所 二〇〇四年二月

稲葉 穰

ナーイ・カラ石窟寺院開窟の歴史的背景について 『西南アジア研究』五八号 二〇〇三年七月

Gordon Whitebridge 著 Charles Masson of Afghanistan (紹介) 『東洋史研究』六二巻二号 二〇〇三年九月

ヨーロッパ日本共同考古学会議 二〇〇三 アジアを掘る(報告) 『漢字と文化』二号 二〇〇四年二月

井波 陵一

●『漢籍目録を読む』 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター東方学資料叢刊第一二冊 二〇〇四年三月

『王国維と二重証法』 富谷至編『辺境出土木簡の研究』 朋友書店 二〇〇三年二月

『紅樓夢と清朝装身具』 『中国の美術』 昭和堂 二〇〇三年十月

●『東洋学文献類目』の編纂の歴史——漢籍との関わりを中心に 『全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ13』 『センター所蔵資料の活用と人文社会科学』 二〇〇三年十一月

●『知の座標』

白帝社(アジア史選書二) 二〇〇三年十一月

●丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』第一巻・二巻(共訳) 岩波書店 二〇〇四年一月、三月(共訳)

『中国におけるヴァルター・ベンヤミン研究について』 『東方学報(京都)』第七六冊 二〇〇四年三月

岩井茂樹

清朝に転送された対馬藩主義成の書契原本と一六三九年前後の北東アジア情勢 『東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究』 ニューズレター No. 1 二〇〇三年五月

大清帝国と伝国の霊 アジア遊学 第五六号 二〇〇三年十月

清朝・朝鮮・対馬——一六三九年前後東北亜細亜形勢——

『明清史研究』二〇輯 韓国明清史学会創立二十周年記念 国際学術大会特輯号 二〇〇四年二月

清末の外銷経費と地方経費 森時彦編『中国近代化の動態構造』 京都大学人文科学研究所 二〇〇四年二月

●中国近世財政史の研究

京都大学学術出版社 二〇〇四年二月

●中国近世社会の秩序形成(編)

京都大学人文科学研究会 二〇〇四年三月

十六世紀中国における交易秩序の模索——互市の現実とその認識—— 岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』 京都大学人文科学研究所 二〇〇四年三月

ウィツテルンクリスチャン

禅とコンピュータ(一) 禅文化 一八九 p. 32-35 二〇〇三年七月

禅とコンピュータ(二) 禅文化 一九〇 p. 97-101 二〇〇三年十月

Embedding Glyph Identifiers in XML Documents 漢字文 献情報処理研究四 p. 74-79 二〇〇三年十月

唐代研究ナリッジベース(共著) 漢字と文化 創刊号 p. 6-8 二〇〇三年十二月

禅とコンピュータ(三) 禅文化 一九一 p. 22-25 二〇〇四年一月

ドイツの漢学・過去と現在 神戸大学創立九〇周年記念事業による文化科学研究科国際シンポジウム 日本の中国研究と

欧米の中国研究報告書 p.19-21 二〇〇四年三月
二〇〇三年T.E.I.メンバースミューティング 漢字と文化二
p.7 二〇〇四年二月

宇佐美 齊

中原中也とネルヴァル ネルヴァル全集第六巻 月報

筑摩書房 二〇〇三年三月

●中原中也全集第五巻 (編集・解題篇分担執筆)

角川書店 四月

伊藤静雄の京都 「現代詩手帖」

思潮社 六月

●中原中也全集第四巻 (編集・解題篇分担執筆)

角川書店 十一月

フランス詩の磁場 「国文学」

学燈社 十一月

●作家の恋文

筑摩書房 二〇〇四年一月

作家の恋文を読む 「ちくま」

筑摩書房 二月

作家の恋文を読む楽しみ

読賣新聞(夕刊) 二月二二日

宇佐美 文理

中国古代の死生観 中国の芸術他

古田真一他編「中国の美
術」 昭和堂 二〇〇三年十月

この本を買っておきなさい 「以文」 四六

二〇〇三年十一月

書画論(中国の) 岸本美緒編

『歴史学事典第一巻 宗教
と学問』 弘文堂 二〇〇四年二月

大浦 康介

戦争に寄せて 『現代文学』第六七号 『現代文学』編集委員
会 二〇〇三年七月

“Sade entre vie et fiction”, in Norbert Schlipa (ed.), *Life
Sade, Paris, L'Harmattan* 二〇〇四年三月

大原 嘉豊

『山西省平順県大雲院弥陀殿壁画に関する考察』 『佛教藝術』
一七二号(共著) 佛教藝術学会 二〇〇四年一月

『高麗国王大藏経写経からみた元朝の宗教政策——太山寺所
蔵「大吉祥陀羅尼経・宝賢陀羅尼経」の制作年代の問題に
寄せて——』 『中国近世社会の秩序形成』
京都大学人文科学研究所 二〇〇四年三月

岡田 暁生

『ピアノを弾く身体』 春秋社 二〇〇三年四月

『探求・ピアノリズム 十九から二十世紀ピアノ奏法』 『レ
コード芸術』 二〇〇三年六月号

『オペラと効果の美学』 三浦信一郎編『音楽学を学ぶ人のた
めに』 世界思想社 二〇〇三年八月

鼎談(小池ちとせ・長木誠司) 『ディスク・ディスクカッショ
ン ムーティ/スカラ座「オテロ」を観る』
『レコード芸術』 二〇〇三年十月号 一〇一—一四ページ)

『里中満智子マンガ名作オペラ1 ニーベルングの指輪1』
解説 中央公論新社 二〇〇三年十月

『里中満智子マンガ名作オペラ2 ニーベルングの指輪2』
解説 中央公論新社 二〇〇三年十二月

『里中満智子マンガ名作オペラ3 椿姫』解説

中央公論新社 二〇〇四年二月

岡村 秀典

中国の初期王権研究の視点 古代王権の誕生I 東アジア編
角川書店 二〇〇三年一月

王墓の成立とその祭祀 古代王権の誕生I 東アジア編
角川書店 二〇〇三年一月

先秦時代の供犠 東方学報 京都第七五冊 二〇〇三年三月
●シンポジウム 三角縁神獣鏡(共著) 学生社 二〇〇三年五月

後漢代大型墓の構造と規格 立命館大学考古学論集III
二〇〇三年五月

紀元前三千年紀の遼東半島 日本考古学協会第六九回総会研
究発表要旨 二〇〇三年五月

神まつりの系譜(上)(下)

日本経済新聞 二〇〇三年八月三日・三〇日

陶磁器のはじまり 中国の美術 昭和堂 二〇〇三年十月
●夏王朝 王権誕生の考古学 講談社 二〇〇三年十二月

籠谷 直人

The International Order in Asia in the 1930s, in Shigen

Akita (ed.) *Gentlemanly Capitalism, Imperialism, and
Global History*, Palgrave, 2003.

『アジア通商網のなかの南アジアと戦前期日本』 秋田茂・水
島司共編『現代南アジア六 世界システムとネットワー
ク』 東京大学出版会 二〇〇三年二月

書評・澤田貴之著『アジア綿業史論——英領期末インドと民
国期中国の綿業を中心として』 『南アジア研究』
日本南アジア学会 二〇〇三年十月

『大英帝国「自由貿易原則」とアジア・ネットワーク』 山本
有造編『帝国の研究——原理・類型・関係——』
名古屋大学出版会 二〇〇三年十一月

加藤 和人

生命科学と社会 [Molecular Medicine] 第四〇巻臨時増刊
号 中山書店 二〇〇三年三月

ゲノムひろば二〇〇二開催レポート(編著) 文部科学省科
学研究費特定領域「ゲノム」四領域 二〇〇三年三月

ゲノムひろば——研究者と社会をつなぐ新しい試み(山岸敦
氏と共著) 『科学』七三巻四号

『社会の中のゲノム研究——サルストン博士に訊く』(J.E.
Sulston 博士インタビュー) 『科学』七三巻四号
岩波書店 二〇〇三年四月

『ヒトゲノム研究のもたらす未来——コリンズ博士に訊く』
(Francis Collins 博士インタビュー) 『科学』七三巻四号

岩波書店 二〇〇三年四月
ヒト幹細胞研究の倫理的・社会的問題 『実験医学』二二卷
八号 羊土社 二〇〇三年五月

必然としての「進化の操作」——現代社会における人と自然
の行方を考える 阪上孝編『変異するダーウィニズム——
進化論と社会』京都大学学術出版会 二〇〇三年十一月
身のまわりの生命科学（石川冬木氏・佐藤文彦氏と共著）
柳田充弘・佐藤文彦・石川冬木編『生命科学』
東京化学同人 二〇〇四年二月

私たちはまだ何も知らないのです 関西サイエンスフォーラ
ム編『次代を担う若者へ』
関西サイエンスフォーラム 二〇〇四年二月

生命誌から見た遺伝子 奥野卓司・ヒューマンルネッサンス
研究所編『市民のための遺伝子問題入門』
岩波書店 二〇〇四年三月

菊地 暁
〈まなざし〉の記憶と記録・書評 佐野眞一『宮本常一のみ
まなざし』アサヒカメラ 二〇〇三年五月号

書評・小国喜弘『民俗学運動と学校教育——民俗の発見とそ
の国民化——』を読んで
日本教育史研究 二二号 二〇〇三年八月
書評・渡辺公三著『司法的同一性の誕生』
京都新聞 二〇〇三年九月

二〇〇四年三月
小林 博行
カプセルのなかの科学——スペンサー・ヴァイスマン論争
阪上孝編『変異するダーウィニズム——進化論と社会』
京都大学学術出版会 二〇〇三年十一月
安永寿延『安藤昌益』『日本史文獻事典』
弘文堂 二〇〇三年十二月
思想と歴史——安藤昌益を手がかりに 八戸市史編纂室『は
ちのへ市史研究』二 二〇〇四年三月

小牧 幸代
英領インド期のセンスと宗教 小谷汪之編『現代南アジア
5——社会・文化・ジェンダー』
東京大学出版会 二〇〇三年一月
パンジャービー民族の自文化表象とイスラーム——聖遺物の展
示をめぐって 黒崎・子島・山根編『現代パキスタン分析
——民族・国民・国家』 岩波書店 二〇〇四年一月

小南 一郎
『孟蘭盆経』から「目連変文」へ 講経と語り物文藝との間
（上） 東方学報（京都）七五冊 二〇〇三年三月
悼辞 北京師範大学中文系編『人民的学者鍾敬文』
学苑出版社 二〇〇三年四月
朋友書店 二〇〇三年五月

●楚辞とその注釈者たち

帝国の「不在」——日本の植民地人類学をめぐる覚書——
山本有造編『帝国の研究——原理・類型・関係——』
名古屋大学出版会 二〇〇三年十一月
からだからかんがえてみる 『出版ニュース』二〇〇四年三
月上旬号 二〇〇四年三月

金 文京
『中国の太子走国説話について』『説話伝承学』一一号（説
話伝承学会） 二〇〇三年三月
『李齊賢在元事跡考』『朝鮮儒林文化の形成と展開に關する
総合研究』 文部科学省科学研究費成果報告
二〇〇三年三月

『金庸と現代日本』『歴史と文学の境界——金庸の武俠小説
をめぐって』 勁草書房 二〇〇三年五月
『中国地図の不思議』『アジア遊学』五六号
書評 黒田彰著『孝子伝の研究』『和漢比較文学研究』三〇
号 二〇〇三年二月
書評 佐藤保・宮尾正樹編『ああ悲しいかな』『東方』二七
三号 東方書店 二〇〇三年十一月

小関 隆
『書評・村岡健次『近代イギリスの社会と文化』』『ヴィクト
リア朝文化研究』一号 二〇〇三年十一月
『書評・土方直史『ロバート・オウエン』』『社会経済史学』
二〇〇三年九月

訳注『魏志倭人伝』 佐原真『倭人伝の考古学』付録
岩波書店 二〇〇三年八月
女神の目覚め——碧霞元君と春の祀り 説話論集一三集
清文堂出版 二〇〇三年十二月
『孟蘭盆経』から「目連変文」へ 講経と語り物文藝との間
（下） 東方学報（京都）七六冊 二〇〇四年三月
『霍小玉傳』に見る唐代伝奇小説の挫折 桃の会論集一集
二〇〇四年三月
道教信仰と文学 筑波中国学論叢二二三
二〇〇四年三月
怪異を語る伝統 説話・伝承学十二号 二〇〇四年三月

坂本 優一郎
『マカロニ・パブル』所報 『人文』第五〇号
二〇〇三年四月
佐々木 克
近代天皇のイメージと凶像 岩波講座『天皇と王権を考え
る』六 二〇〇三年一月
文久三年八月政変と薩摩藩 京都大学『人文学報』八七号
二〇〇三年三月
日本の開国と国家的課題 衆議院憲政記念館『ペリー来航百
五十年特別展』 二〇〇三年五月
榎本武揚と「エゾ共和国」『新選組の時代』
NHK出版 二〇〇三年十二月
幕末の政治・社会変動と亀岡地域 『新修亀岡市史』本文編

二〇〇三年五月

二〇〇四年三月

佐野 誠子

「志怪書誕生の素地としての『風俗通義』——『風俗通義』における災異と怪異」『中国——社会と文化』一八号 二〇〇三年六月

「志怪中所見的『天』和『神』」第五回文学与宗教国際学術 研討会報告論文 香港バプテスト大学 二〇〇三年十二月

曾布川 寛

●中国五千年の名宝・上海博物館展 大広 二〇〇三年四月
玉器の画像学『中国の美術』昭和堂 二〇〇三年十月

高木 博志

疑惑の継体天皇陵 別人説は戦前から

朝日新聞 二〇〇三年一月三十一日

近代が変えた桜の景観 京都新聞 二〇〇三年四月十一日

維新変革と天皇をめぐる賤・穢 凶録『血すじ』と「家がら」 大阪人権博物館 二〇〇三年四月

●「私」にとつての国民国家論(共著) 日本経済評論社 二〇〇三年四月

私の視点・陰陽師ブーム 隠された差別の歴史に光を 朝日新聞 二〇〇三年十一月

日本美術史／朝鮮美術史の成立(朝鮮語) 『国史の神話を越えて』 ヒューマニスト社 (大韓民国) 二〇〇四年三月

京都新聞 二〇〇四年三月十一・十八・二十五日・四月一日

高田 時雄

A Note on a 16th Century Manuscript of the "Chinese Alphabet". In: A Life Journey to the East. Sinological Studies in Memory of Giuliano Bertucchi (1923-2001). 二〇〇二年十二月

中国學に關する南歐所在資料の研究 (科學研究費研究成果報告書) 二〇〇三年三月

吐蕃期敦煌有關受戒的藏文資料 新世紀敦煌學論集(巴蜀書社) 二〇〇三年三月

敦煌學國際連絡委員会について 東方二七〇 二〇〇三年八月

全國漢籍資料庫構建紀要 古籍聯合目錄資料庫合作建置專集(台灣國家圖書館) 二〇〇三年十月

敦煌寫本を求めて——日本人學者のヨーロッパ訪書行 佛教藝術二七號 二〇〇三年十一月

漢字文化の全き繼承と發展のために 漢字と文化 二〇〇三年十二月

日本における過去一兩年の敦煌研究 敦煌學國際連絡委員會 通訊創刊號 二〇〇三年十二月

《廣州通紀》初探 中外關係史 新史料與新問題 (科學出版社) 二〇〇四年一月

書物と漢字の未來のために しにか第十五卷第三號 二〇〇四年三月

日清・日露戰爭で近代日本がどうかわったか?——文化・宗教を中心 調査報告書第二二集 仙台市歴史民俗資料館 二〇〇四年三月

高階 絵里加

よみがえった《繩文記号》——須田剋太の二点の絵画 所報 人文 第五〇号 二〇〇三年三月

East-West Cultural Exchange in Art—France and the Orient in the 1880's—(1) (2) (3) (4), Journal of Japanese Trade and Industry, March/April, May/June, July/August, September/October, 2003

(翻訳)サルヴァトーレ・セッティス カラヴァッジョの《聖マタイのお召し》 第三二回美術講演会講演録 鹿島美術財団 二〇〇三年十月

記憶と歴史——『世の途中から隠されていること』木下直之 著——日本の美学 第三六号 二〇〇三年十二月

ドガとイタリア 美術フォーラム21 第九号 二〇〇三年十二月

●(翻訳)カラ・ラックマン モネ

岩波書店 二〇〇三年十一月

East-West Cultural Exchange in Art—France and the Orient in the 1880's—, (5), (6) Economy, Culture & History JAPAN SPOTLIGHT Bimonthly, January / February, March/April, 2004

みやこの近代六九—七二 竹内栖鳳と日本絵画の革新①④

竹沢 泰子

国際シンポ 人種概念の普遍性を問う

京都新聞 二〇〇三年一月

「人種概念の普遍性を問う——植民地主義、国民国家、創られた神話」(編著) 京都大学人文科学研究所国際シンポジウム／二〇〇二国際人類学民族学議京都会議 報告書 京都大学人文科学研究所 二〇〇三年三月

人種とアメリカ人類学 『文化人類学のフロンティア』綾部 恒雄編 ミネルヴァ書房 二〇〇三年四月

国際最前線 国際シンポジウム「人種概念の普遍性を問う」エコソフィア一一号 二〇〇三年五月

「アメリカ人類学にみる進化論と人種」『変異するダーウィニズム——進化論と社会』阪上孝編 京都大学学術出版会 二〇〇三年十月

「今ふたたび、人種とは何か——現代の人種主義を見つめるために」『トランスナショナルリティ研究——場を越える流れ』大阪大学二一世紀COEプログラム「インターフェイ」の人文科学」二〇〇二・二〇〇三年度報告書 二〇〇三年十二月

「人種概念の洗い直しから人種差別理解の可能性を探る——国際シンポジウム「人種概念の普遍性を問う」を振り返って」『月刊 ヒューマンライツ』一八九号 二〇〇三年十二月

「日系人コミュニティから見た現代アメリカ社会と市民活動」(監修) 国際交流基金CGP公開シンポジウム報告書

二〇〇三年十二月

二〇〇三年十二月

「アメリカ合衆国——揺らぐ境界・揺らぐ境界」『国勢調査の文化人類学』青柳真智子編

古今書院 二〇〇四年二月

Yasuko Takezawa ed. *Contemporary Society and Civil Society in the United States: Through the Eyes of the Japanese American Community. Proceedings of the CGP Public Symposium. Japan Foundation.* 二〇〇四年三月
Brian Hayashi and Yasuko Takezawa eds. *New Waves: Studies on Japanese American in the 21st Century. Institute for Research in Humanities, Kyoto University.* 二〇〇四年三月

武田 時昌

物類相感をめぐる中国の類推思考 中国二一 Vol.15 二〇〇三年三月

〈解説〉 思想的アブローチによる中国博物学研究の試み
小林清市著『中国博物学の世界』 農山漁村文化協会 二〇〇三年九月

加藤弘之の進化学事始 阪上孝編『変異するダーウィニズム 進化論と社会』京都大学学術出版会 二〇〇三年十一月
漢字情報学事始め 漢字と文化 創刊号 二〇〇三年十二月

田中 淡

日本における中国庭園 蔡毅編『日本における中国文化』

(日文版)

勉誠出版 二〇〇二年三月

●中国古代造園史料集成——増補 哲匠録 豊山篇 秦漢——六朝(共編、外村中・福田美穂と)京都大学人文科学研究所 報告 中央公論美術出版 二〇〇三年五月

コメント・川端俊一郎氏の「南朝尺モジュール」材と分」による法隆寺营造」説にたいする私見 建築雑誌 日本建築学会 二〇〇三年六月

公的建築の伝統——宮殿と寺廟 古田真一・山名伸生・木島史雄編『中国の美術』 昭和堂 二〇〇三年十月

私的建築の伝統——庭園と住まい 宇文愷 同右

コメント悪女の好感度上昇中 朝日新聞(夕刊) 二〇〇三年一月三二日

中国建築の年代学的通史を如何に叙述するか 建築雑誌 日本建築学会 二〇〇四年二月

田中 雅一

CD-ROM『南インドのヒンドゥー寺院をめぐる係争(一八七六一一九二四)データベース』 京都大学アジア・アフリカ地域研究科 二〇〇三年二月

Hinduism in Singapore: Ethno-nationalization in Process. In Junji Koizumi (ed.) *Dynamics of Cultures and Systems in the Pacific Rim: Anthropological Studies*. Osaka: Osaka University Press. 二〇〇三年三月
Religion in Everyday Life In Veena Das (ed.) *The Or-*

ford India Companion to Sociology and Anthropology. Oxford University Press. 二〇〇三年三月

妖術と邪術 山下晋司編『日本における文化人類学教育の再検討——新たな社会的ニーズのなかで』平成一三—一四年度科学研究費補助金(基礎研究)(b)(1)研究成果報告書 二〇〇三年三月

「人類学のワイルドサイド」を企画して

京都大学学術出版会 二〇〇三年四月
親族研究における進化概念の受容 進化から変容へ 阪上孝編『変異するダーウィニズム 進化論と社会』

もう一つの在日 米軍基地の人類学的研究をめぐって 大阪大学二一世紀COEプログラムインターフェイスの人文学 二〇〇二—二〇〇三年度報告書『トランスナショナルリテイ研究 場を越える流れ』(小泉潤二・栗本英世責任編集) 大阪大学 二〇〇三年十二月

資源としてのフェティッシュ 『資源に関する小論文集』

東外大アジア・アフリカ言語文化研究所 二〇〇四年一月
良き場所からガイアへ カロス・カスターナダとスターホーク 『人環フォーラム』第一四号 二〇〇四年三月

田中 祐理子

一九〇〇年の臨床身体・試論 表象文化論研究一 二〇〇三年三月

谷川 穂

明治六年松本小教院事件——教部省教化政策の地方的展開、あるいは「教化」と「教育」のはざま 日本史研究 四九 二号 二〇〇三年八月

明治前期における僧侶養成学校と「俗人教育」——真宗本願寺派普通教校の設置をめぐって 日本教育史学 四六集 二〇〇三年十月

富永 茂樹

芸術から社会学への架橋 満田久義編『現代社会学への誘い』朝日新聞社 二〇〇三年三月
京都の文化力を考える 『都市研究・京都』第一五号

中間集団の声と沈黙——七九一年夏—秋 『人文学報』第八八号 京都大学人文科学研究所 二〇〇三年三月

フランス革命と社会学 『社会学雑誌』第二〇号 神戸大学社会学研究会 二〇〇三年三月

富谷 至

●辺境出土木簡の研究 朋友書店 二〇〇三年二月
亭制に関する一考察 富谷至編『辺境出土木簡の研究』朋友書店 二〇〇三年二月

●韓非子 中央公論新社 二〇〇三年五月

●木簡・竹簡の語る中国古代——書記の文化史 岩波書店 二〇〇三年七月

中国学・韓国学の十年後（歴史・古代）

しにか 二〇〇四年三月

江陵張家山出土「二年律令」訳注稿 その（一）東方学報 七六冊 二〇〇四年三月

二年律令に見える法律用語（一）東方学報 七六冊 二〇〇四年三月

中西裕樹

●語海豊方言基本詞彙集（京都大學人文科学研究所言語史叢刊 第一冊） 二〇〇三年三月

200 basic sentences of She language（池田巧編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査』pp. 259-284）

語海豊方言故事四則（北野浩章編『論集：東・東南アジアの少数言語の現地調査』pp. 119-154） 二〇〇三年三月

藤井正人

内外東方学界消息 第十二回世界サンスクリット会議（第一部会 ヴェータ）『東方学』第百七号 二〇〇四年一月

藤原辰史

有機農業の〈ナチズム体験〉『現代文明論』第四号 二〇〇三年三月

ナチスの有機農業 京都新聞（朝刊） 二〇〇四年一月二八日

総力戦とエコロジズム——「戦時農業」をめぐるナチスの言説から『現代文明論』第五号 二〇〇四年二月

ドメステイケーション試論——「人間の自己」家畜化と現代」を手がかりに『池田浩士二〇〇四 Past & Present』 二〇〇四年三月

船山 徹

龍樹、無著、世親の到達した階位に関する諸伝承 東方学一〇五 二〇〇三年一月

五世紀中国における仏教徒の戒律受容 科研（基盤研究C）成果報告書「唐宋道教の心性思想研究」（研究代表者山田俊） 二〇〇三年三月

仏教史学会編『仏教の歴史的地域的展開』（シンポジウム司会担当） 法蔵館 二〇〇三年三月

古松 崇志

元代江南の禪宗と日本五山——「勅修百丈清規」の成立と流伝——『古典学の現在』V 二〇〇三年一月

脩端「辯達宋金正統」をめぐる——元代における「遼史」『金史』『宋史』三史編纂の過程——『東方学報 京都』第七五冊 二〇〇三年三月

女真開国伝説の形成——『金史』世紀の研究——『古典学の再構築』研究成果報告集V『論集 古典の世界像』 二〇〇三年三月

附属図書館谷村文庫蔵『勅修百丈清規』元刊本・五山版——

元代江南禪宗と日元文化交流の歴史を解明する重要資料

——『京都大学附属図書館報 静脩』Vol. 40, No. 3 二〇〇四年一月

真下 裕之

Tabagati Akbariにおける年代の錯誤について 論集「原典」：『古典学の再構築』研究成果報告集II 『古典学の再構築』総括班 二〇〇三年三月

A historiographical study of the so-called Ahwazi Asad Big Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 36-1 (2001/2)

書評：近藤治著『ムガル朝インド史の研究』『歴史評論』六四七 二〇〇四年三月

水野 直樹

●朝鮮人留学生たちの京都（人文研ブックレット No. 16） 同志社大学人文科学研究所 二〇〇三年一月

●日朝交渉——課題と展望（共編） 岩波書店 二〇〇三年一月

創氏改名 『歴史学事典第一〇巻・身分と共同体』 弘文堂 二〇〇三年二月

尹東柱詩碑（同志社大学）『講座・人権ゆかりの地をたずねて（二〇〇二年度講演録）』

（財）世界人権問題研究センター 二〇〇三年三月

植民地支配政策史研究の現状と課題 『世界の日本研究二〇〇二——日本統治下の朝鮮：研究の現状と課題』

国際日本文化研究センター 二〇〇三年三月

アジア系外国人学校出身者の受験資格問題を考える 『世界』七二三号 二〇〇三年五月

社会科教科書における在日韓国・朝鮮人関係記述——中学校教科書を例にして——『全外教通信』（全国在日外国人教育研究協議会）No. 82 二〇〇三年五月

一九三〇年代後半朝鮮における思想統制政策——咸鏡南北道の「思想浄化工作」とそのイデオロギー——（日本文・朝鮮文）延世大学校国文学研究院二〇〇三年度国際学術会議『日帝下ファシズム支配政策と民衆の生活相』

二〇〇三年五月

戦時期朝鮮における治安政策——「思想浄化工作」と大和塾を中心に——『歴史学研究』第七七七号 二〇〇三年七月

戦後史の中の民族学校——国立大学受験資格問題から見えるもの——『インパクション』第一三七号 二〇〇三年八月

二一世紀新しい韓日関係とメディア（韓国言論財団・韓国女記者クラブ主催京都セミナー）主題発表（朝鮮文）『女記者』第一三三号（ソウル 韓国女記者クラブ） 二〇〇三年十二月

●『生活の中の植民地主義』（編者） 人文書院 二〇〇四年一月

シンポジウムの開催にあたって(小特集「教科書を検証する
歴史研究者シンポジウム二〇〇三——韓国の新しい教科書
との対話——)『日本史研究』第四九七号
二〇〇四年一月

「創氏改名」の実施過程について『朝鮮史研究会会報』第一
五四号
二〇〇四年一月

「創氏」強制の文書発見・韓国で進む歴史資料の公開

『毎日新聞』二〇〇四年二月二〇日夕刊
朝鮮総督府はなぜ「創氏改名」を実施したか(朝鮮文)『明
日を開く歴史』第一五号(ソウル、図書出版ソヘムンジ
ブ)
二〇〇四年三月

戦前・戦後日本における民族教育・民族学校と「国民教育」
『東西南北』二〇〇四(和光大学総合文化研究所年報)

二〇〇四年三月

植民地独立運動に対する治安維持法の適用——朝鮮・日本

「内地」における法運用の落差——浅野豊美・松田利彦
編『植民地帝国日本の法的構造』
信山社 二〇〇四年三月

宮 紀子

「対策」の対策——大元ウルス治下における科挙と出版「古
典学の現在」五 文部科学省科学研究費補助金特定領域研
究「古典学の再構築」領域横断研究「日中韓版本研究会」
二〇〇三年一月

ひっくりかえった葡萄棚の謎『人文』第五〇号

二〇〇三年三月
モンゴルが遺した「翻訳」言語——旧本「老乞大」の発見に
よせて——(上)『内陸アジア言語の研究』一八
二〇〇三年八月

「混一疆理歴代国都之図」への道『NHKスペシャル文明の
道五 モンゴル帝国』NHK出版社 二〇〇四年二月
ユーラシアの旅五 モンゴル帝国の時代 モンゴルと中国
カラコルム/上都/大都/杭州/慶州/泉州『NHKス
ペシャル文明の道五 モンゴル帝国』
NHK出版社 二〇〇四年二月

「混一疆理歴代国都之図」への道——十四世紀四明地方の
「知」のゆくえ——『絵図・地図からみた世界像』京都
大学大学院文学研究科「二世紀COEプログラム」グロー
バル化時代の多元的人文学の拠点形成「二五・一六・一
七世紀成立の絵図・地図と世界観」中間報告書
二〇〇四年三月

宮 宅 潔

「漢代の敦煌戦線と食糧管理」富谷至編『辺境出土木簡の研
究』朋友書店 二〇〇三年二月

「張家山漢簡〈二年律令〉解題」『東方学報』京都第七六冊
二〇〇四年三月

麥谷邦夫

竹中通庵『古今養性録』と貝原益軒『願生輯要』『養生訓』

『宮澤正順博士古希記念 東洋——比較文化論集——』

青史出版 二〇〇四年一月

村 上 衛

閩粵沿海民の活動と清朝——京都一九世紀前半のアヘン貿易
活動を中心に——『東方学報』第七五冊
二〇〇三年三月

書評・三木聡『明清福建農村社会の研究』『社会経済史学』
六八巻六号 二〇〇三年三月

書評・Eichi Motono, *Conflict and Cooperation in Sino-
British Business, 1860-1911: The Impact of the Pro-
British Commercial Network in Shanghai* 『東洋史研
究』第六二巻三号 二〇〇三年十二月

清朝と漢奸——アヘン戦争時の福建・広東沿海民対策を中心
に——森時彦編『中国近代化の動態構造』
京都大学人文科学研究所 二〇〇四年二月

森 時彦

●中国近代社会の変容についての数量データと基礎的資料の収
集と分析——研究と資料——(編著)平成十二・十四年度科学
研究費補助金基盤(B)(一)研究成果報告書
二〇〇三年四月

清末民初における河北省新河県の人口動態『中国近代社会
の変容についての数量データと基礎的資料の収集と分析
——研究と資料——』平成二二・一四年度科学研究費補助

金 基盤(B)(一)研究成果報告書 二〇〇三年四月
紹介 安志輝主編 新方志『新河県志』『東洋史研究』第六
二巻三号 二〇〇三年十二月
文部科学省平成一五年度二二世紀COEプログラム「東アジ
ア世界の人文情報学研究拠点——漢字文化の全き継承と発
展のために——」に寄せる期待『漢字と文化』創刊号
二〇〇三年十二月

●中国近代化の動態構造(編著)

京都大学人文科学研究所 二〇〇四年二月
中国綿業近代化の動態構造 森時彦編『中国近代化の動態構
造』京都大学人文科学研究所 二〇〇四年二月

守 岡 知彦

「Choon 実装の歩み: XEmacs CHISE から libchise <
CHISE Symposium 2003 報告/資料集 (http://www.
kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/projects/chise/
symposium2003/)」
二〇〇三年三月

「文字画像のマークアップの試み」東洋学へのコンピュータ
利用 第一四回研究セミナー 二〇〇三年三月

「CHISE Project」漢字文献情報処理研究 第4号 漢字文
献情報処理研究編 好文出版 二〇〇三年十月一日

「文字知識処理環境 CHISE の基盤ソフトウェア」Linux
Conference 抄録集 第1巻
日本リヌックス協会 二〇〇三年

コラム「CHISEプロジェクトの紹介」フォント徹底解剖

森本 淳 生

新刊紹介・樋口覚「雑音考——思想としての転居」(人文書院 二〇〇一年)『国文学 解釈と鑑賞』

二〇〇三年三月
対談・美と戦争をめぐる(細見和之)『文藝別冊 小林秀雄 はじめての/来るべき読者のために』
二〇〇三年八月

安岡 孝一

Webにおける画像とテキストの融合

舞鶴技術研究会講演会 二〇〇三年三月

透明テキスト付き画像へのいざない 第一四回「東洋学への

コンピュータ利用」研究セミナー 二〇〇三年三月

日中韓越の壁を越えた情報処理はあるのか D/SIGN, No. 4

二〇〇三年五月

Maria Toledo Sings the Best of Luiz Bonfá (ライナーノーツ)

二〇〇三年十月

『東洋学文献類目』編纂の歴史——CHINA3 全国文献・情報

センター人文社会科学学術情報セミナーシリーズ No. 13

二〇〇三年十一月

キー配列の規格制定史 日本編——JISキー配列の制定に

至るまで システム/制御/情報 Vol. 47, No. 12

二〇〇三年十二月

テキストと文字、ストリームとコード 漢字と文化 創刊号

二〇〇三年十二月

キー配列の規格制定史 アメリカ編——ANSIキー配列の

制定に至るまで システム/制御/情報 Vol. 48, No. 2

二〇〇四年二月

テキスト情報階層モデル 漢字と文化 第2号

二〇〇四年二月

透明テキスト付き画像作成ツールの開発 第一五回「東洋学

へのコンピュータ利用」研究セミナー 二〇〇四年三月

山室 信一

●「ユーラシアの岸辺から——同時代としてのアジアへ」

岩波書店 二〇〇三年三月

敗戦と引き上げ 私の「満州国と戦後」①

朝日新聞 二〇〇三年七月二十五日

満映と留用 私の「満州国と戦後」②

朝日新聞 二〇〇三年八月一日

建国大学と出ニッポン 私の「満州国と戦後」③

朝日新聞 二〇〇三年八月八日

大アジア主義と大アジア研究 私の「満州国と戦後」④

朝日新聞 八月一五日

抑留と告発そして断念 私の「満州国と戦後」⑤

朝日新聞 二〇〇三年八月二十九日

斬馬剣の下に——石原莞爾と日本社会 佐高信「石原莞爾

——その虚飾」解説 講談社 二〇〇三年八月

キリング・フィールドからバックス・アジアーナへ 山室信

一他編『アジア新世紀・第八巻——構想』

岩波書店 二〇〇三年八月

臨場感を持ったアジア認識を

●「多にして一のアジア」ハンクル版 京都新聞 二〇〇三年九月二四日

ソウル・チャンギ出版 二〇〇三年十月

政治小説における思想空間 新日本古典文学大系・明治篇

第一六巻月報 一三 二〇〇三年十一月

『国民帝国』論の射程 山本有造編『帝国の研究——原理・

類型・関係』名古屋大学出版会 二〇〇三年十一月

文献解題——『満鉄史』『法制官僚の時代』『近代日本の知と

政治』『キメラ——満州国の肖像』『思想課題としてのアジ

ア——基軸・連鎖・投企』黒田日出男ほか編『日本史文

献事典』弘文堂 二〇〇三年十一月

未来への記憶——他者認識と価値創出への視点『国際文化

会館会報』第一四巻第二号 二〇〇三年十二月

明治維新とアジアの変革 井上勲編『日本の時代史』二〇・開

国と幕末の動乱』吉川弘文堂 二〇〇四年一月

山本 有 造

石田興平博士と石田文庫 「経済史研究」(大阪経済大学日本

経済史研究所) 七号 二〇〇三年三月

Japanese Empire and Colonial Management

Nakamura Takafusa and Odaka Konosuke (eds) *Econo-*

mic History of Japan 1914-1955: A Dual Structure,

Oxford University Press, 2003 二〇〇三年六月

(書評)『満洲国』はいかにつくられたか——山田豪一『満洲

国の阿片専売』——「東方」二六八号 二〇〇三年六月

(書評)金洛年『日本帝国主義下の朝鮮経済』『社会経済史

学』六九巻二号 二〇〇三年七月

(選評)中林真幸『近代資本主義の組織』

「日本経済新聞」二〇〇三年十一月

●帝国の研究——原理・類型・関係——(編著)

名古屋大学出版会 二〇〇三年十一月

●『満洲国』経済史研究(単著)

名古屋大学出版会 二〇〇三年十二月

横山 俊 夫

ちぎれちぎれの躰方/無礼不躰も文明の内/節用集のなかの

お雛さま/礼法百科をかざる吉野の花/節用集と富士山/

節用集は福をもたらす宝典/絵入りの書物がにぎわう国/

早引節用集は上方の気くばりの産/あの世想いがささえる

文明/雅好きは最上級志向/めでたい本とこわい本/占い

と淡くつきあう人もあり——連載「節用の日本文明 其の

六〜十七」「ひととき」第三巻第一号〜第十二号

株式会社ジェイアール東海エイジェンシー

二〇〇三年一〜十二月

エネルギーをめぐる作法(新宮秀夫氏講演、横山企画司会)

「ホメオ京都」七 ホメオ京都事務局 二〇〇三年三月

「京都大学の教育目標を語る」(京大懇話会他、共同企画・編集) 平成十四年八月三一日開催京都大学全学教育シンポジウム特別部会記録 京都大学 二〇〇三年三月
文化のモダニズム——文明、作法、相性(高橋世織氏と対談) 國文學 第四八巻五号 二〇〇三年四月
「イスラームと世界」(第二〇回比較会議報告書、運営・討論参加) 比較会議事務局

日本アイ・ビー・エム株式会社 二〇〇三年四月
「句会報」(一句掲載) 「氷室」通巻一二八号

二〇〇三年七月
大学院地球環境学堂三才学林看板上掲式

「京大広報」No.581 二〇〇三年七月
イギリス体験と日本——文化交流の個人史から(萩原延壽氏談、聞き手、横山) 萩原延壽「自由の精神」所収

みすず書房 二〇〇三年九月
「紅萌」第四号(共同編集、編集後記)

京都大学情報化推進部大学情報課 二〇〇三年九月
「京都百年考 文化芸術都市の創造にむけて」(共同執筆・京都経済同友会二一世紀委員会、山折哲雄座長) 社団法人京都経済同友会 二〇〇三年十月

ヨーロッパに伝わった不思議の国「新訂増補 週刊朝日百科」 71 日本 の歴史 近世II——①異国と異文化 鎖国下の日本」 朝日新聞社 二〇〇三年十月

前掲書、図版・事項・コメント解説(共同補訂) 同右
世界遺産と水 松下電工二〇〇四年カレンダー「木田安彦ガ

ラス絵の世界」(横山前文、図版解説/全国カレンダー展 文部科学大臣賞) 松下電工 二〇〇三年十二月
久米島具志川間切の日選び「久米島 西銘誌」所収久米島西銘誌編集委員会 二〇〇三年十二月
日いづる国を知る手だて/明治節用大全は節用集か/新しい節用集が望まれる——連載「節用の日本文明 其の十八」 二十「ひととき」第四巻第一―三号

株式会社ジェイアール東海エイジェンシー 二〇〇四年一―三月

「近江舞子放談会(二一世紀の生命科学と社会) セッション一/科学とことば(小南一郎氏話題提供)」(菅原努・山岸秀夫・内海博司各氏と共同企画、編集) 『環境と健康』十七巻一号(財)体質研究会・(財)慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団 二〇〇四年二月

●「京都大学大学院 地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林年報 平成一四年度」(編集代表)

京都大学大学院地球環境学堂 二〇〇四年三月
「紅萌」第五号(共同編集、横山編集後記)

京都大学情報化推進部大学情報課 二〇〇四年三月
●京都文化会議2003報告書(共同企画・編著)

京都文化会議組織委員会 二〇〇四年三月
京都提言2003(十一月二〇日)/KYOTO PROPOSLS 2003(30 November) 共同執筆/P.F.ローニッキー・横山 共著 右掲書所収